禮容筆粹　二

ロ仁9
1264
2

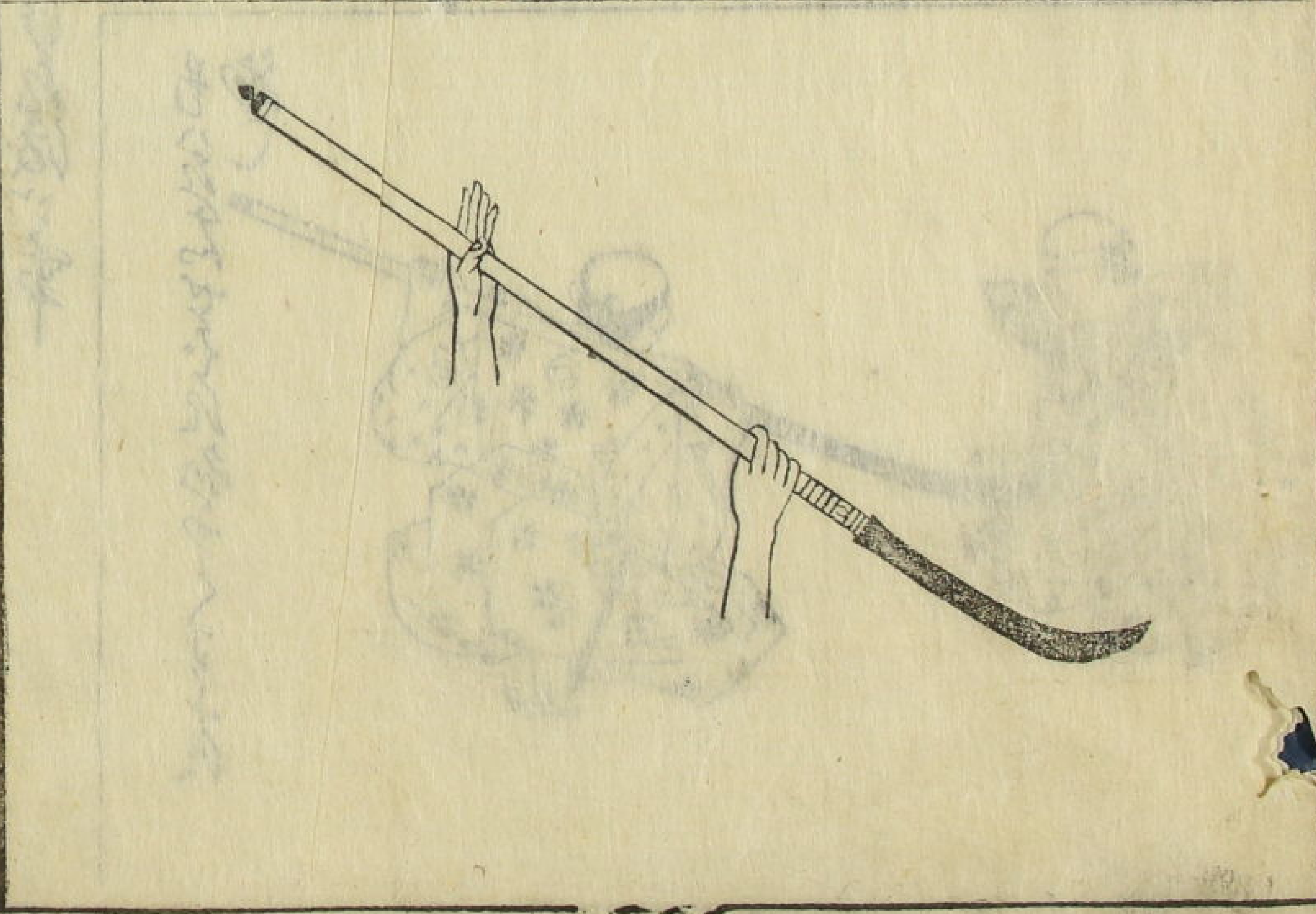
礼容筆粋巻之二　長刀うけ渡しの事

一長刀ハ座敷ひろき処にてハ右に持て鋒先(きつさき)をあの方の外へなをし石突(いしづき)をあい人の方へさし合肩渡す人ハ左の方石突をもちよし渡す人ハなをとつその下を左に持て陰(いん)のかたにいれなから石づき此方を陽の方よりまわし先ハ迄へなるやう山のしいの少し本を宛(あて)にして向て又左に持き(せき)キハ左を押立てさうりなる左の肩にかつき陰(かげ)のあらへすりと少し右を並(にぎ)ひから人のきわよりゆかたくみてたの肩にぬいた野(かた)の肩より陰(かたさき)へ添ひかしうけとる隙はぬるやう入かたさき出して自らけれ人のたく石突さしせんて胸(むね)をのむしにいかん左を下すとまり渡すまし渡す人ハなをし渡しおかぬ逢さ刃先にて持渡すしあいかたの方にかへりて右の渡し(どし)歩にのきて一礼して向し手にてかへしきわのこを一礼ともに礼のさきにとかなへば得そ退(しりぞき)くとさ手を

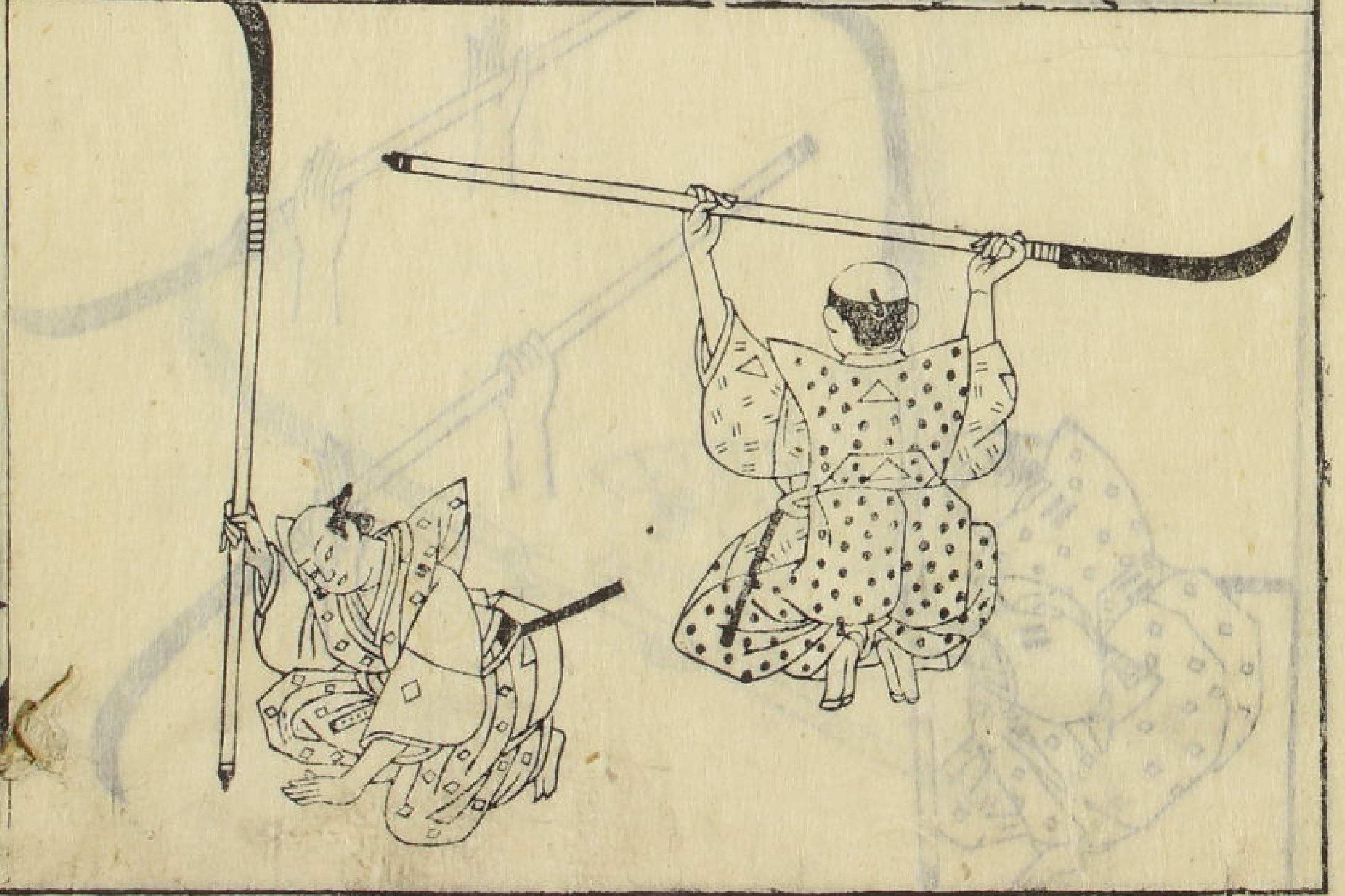
京都府立図書館
門　ロ1-0
類　1.264
巻　2

同構なり

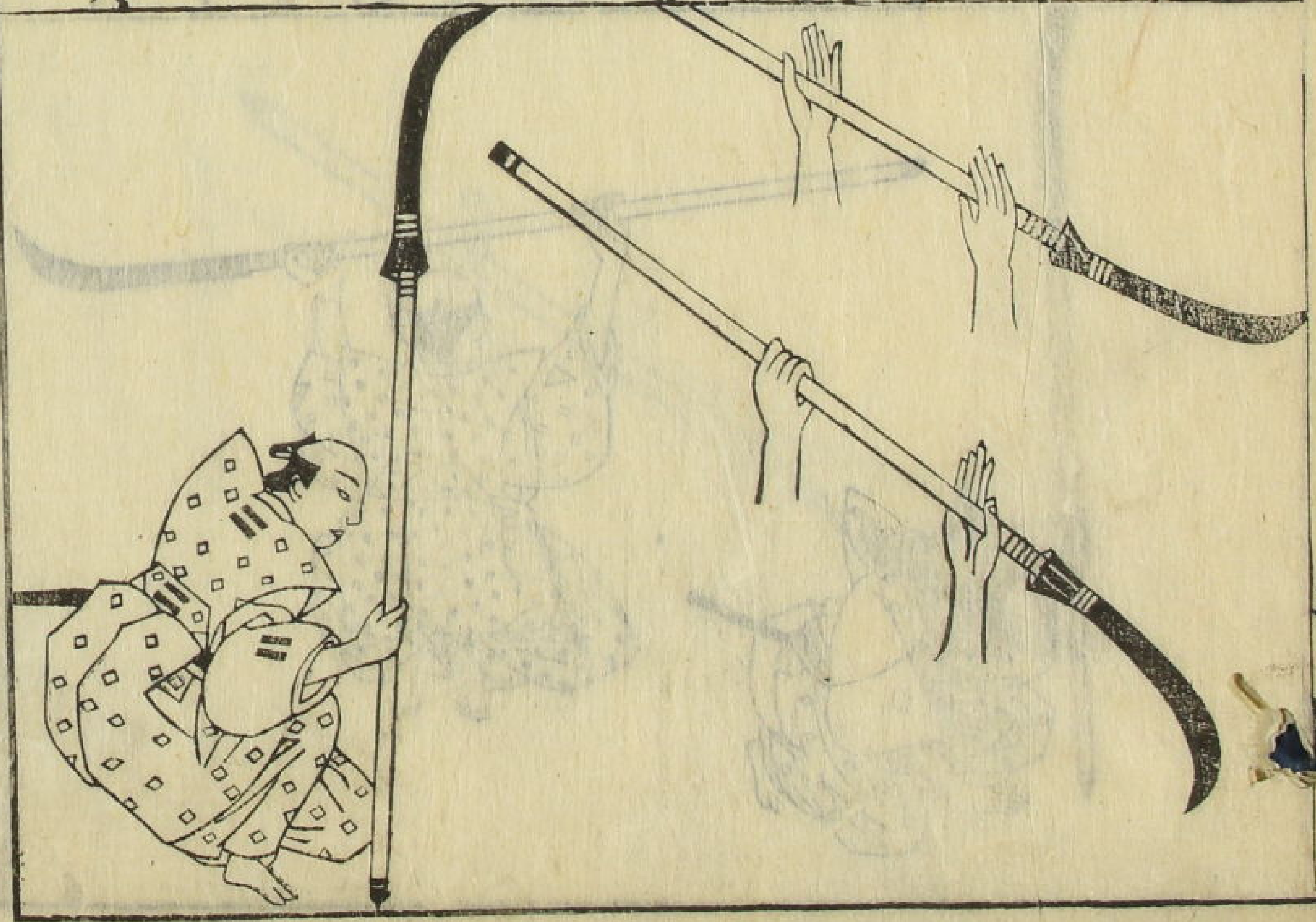
太刀のさき刃を我方へなし此時ニ
長刀の石突を左より少し退るも是
は長刀の柄を我が手の内へ掛る
敵は少し手のやうにおのれが力を
きくつよんでさのみ手を肩
をつけ候ふてもくさしき太刀の腰よ
りまぜば上段に上ぐ太刀の手の内は左
手にて逆手にとれ右手は下にてなして石突
の方は陰の手にとれ太刀をさしの遅
はおしそて背後さへの方へなし
づき候得は太刀ハなして下をむたをさ陰
太刀を陽にして卒度け方へおしやりを
返して仕廻はいざるひ留らんさん
じあんよう也



同じく太刀の上をしてたのひざはつき
石突は上にて刃のうちへふりかくし左
のかくれ柄にむけもわりて右のひざを
上げ石突をつきたてひざたてきを
つき上ぐ退をして刃をまたたも下の
手の下をれおふくかりしも手の下を
れおおしことひろう付るもわりて左
より返しおおし立てたかもとたのひざ
をつき石突を上げて立さなんふり又
しやむ仰方へおし入れ返さ仕まひを
めしいれるとも言う陰と右の作法
かまへくみこさ柄実繁ありそうよく
師伝はゆくさ究むべし修行すべし
一かんようるべくひきる兵ハたんはち
始まりて乱るらんよろし

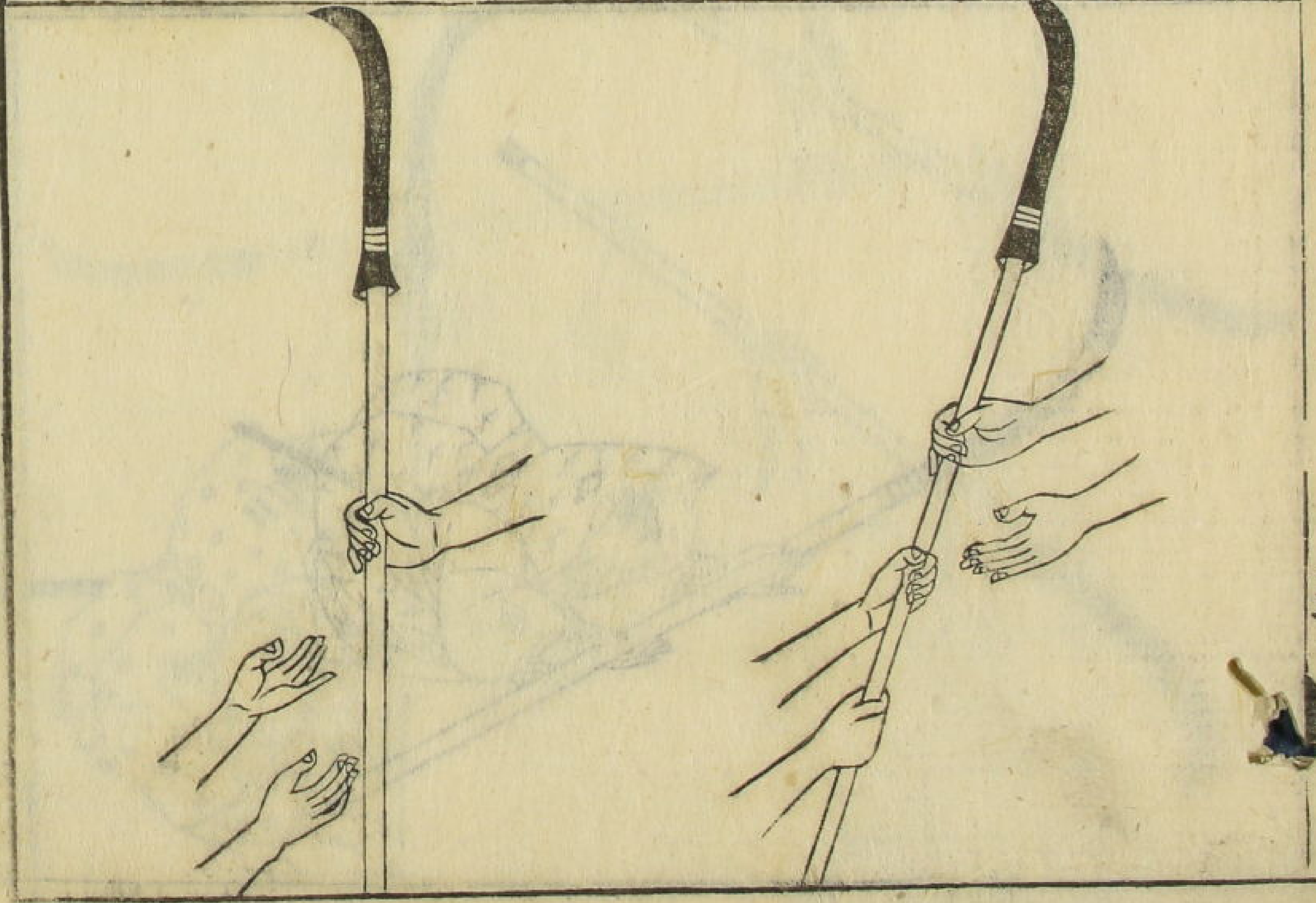


同胴めぐりの内
長刀なぎはらふべき次第ハ太刀をさし合せ
のあたりをくりひざをつきたのまれ
下より太刀の手をよけ陰陽の構
ねすりし方へ打出し太刀の手を
払ひ太刀を下へ引れたと上より受
て太刀をはねて太刀のひざをなでた
のひざをつき小手のひざの太刀は
まかし左手をさし文弾のとおり
さしたる膝と両手をつき右をせば
きてものの下にかけてより切る右手
石づきの方の下へいれて太刀のかし
らのあたりを打出して構へなる手
小手をしてくるりともしより打落
たたせてき構所とのなし



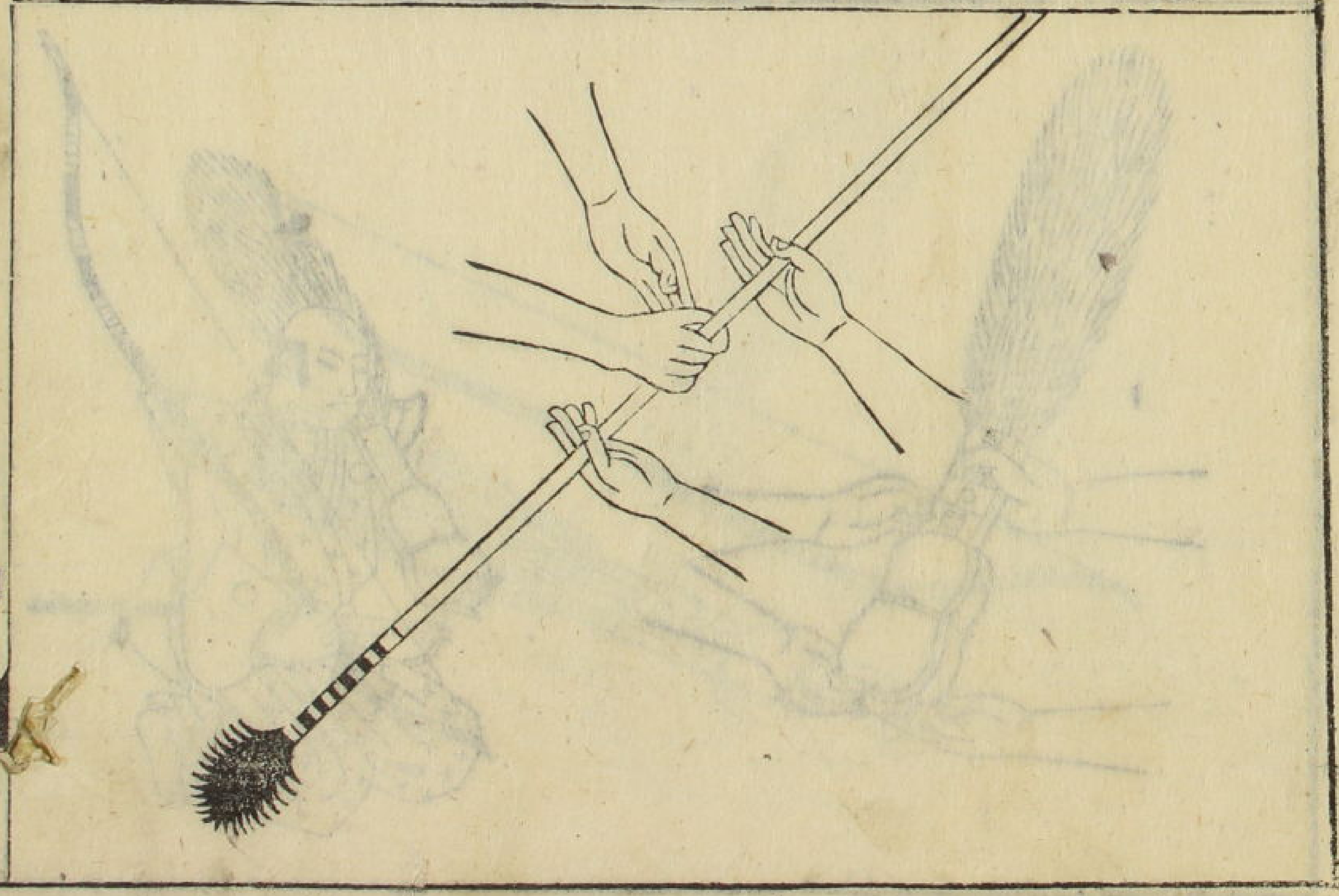
長刀構へより
仕太刀にとまり自然長刀を構へにする
よりうけ時其人の方より仕太刀て下
出構へ構八構への如く太刀より
いて下にふり構へ太刀をさげるが
太刀の柄をもつて其人の前にのべ
石づき仕太刀の太刀なるやふにかへし
中ぶくに返し太刀を払ふ八前後構
まてもの構よりに頭をこさせ
たのまさにかへしけ武八同のうへふりて
し瑞不よりきて其当てし唯中をそ
構への差わり仕太刀ハ太刀の其の鍔を
よなして両構を真につき柄の方
むかい流れるさまして頂戴をなし
その仕太刀おて次第立させまするよ
いこむし

同刀者をの下部かもたし持する時は刀者(てきや)はもちべき次第右より出すべく右くさし上刀者の次のうへへ出る先し石突(づぎ)下へ向る様にして右の手はそのゆゑ持かて立ありしらよし差しら主人の(らん)後ある刻にんをうつばついでてと請ふべし刀者つくそいよとも紙は忘れずお鞘をかづめく石突(すへ)は鐺の右かし刀者(てさん)より右方へ向ぐ主人に向くかでも及べき作法(さほう)なけ出るまくもの丁寧に主人の中より鐺(さや)をとてさく事おしたるはし右の上下の心得御無く(ごく)のごとし不忠(ふそう)なる無礼(むれい)としお無きようはやの礼義をせらるうちいでこるべし



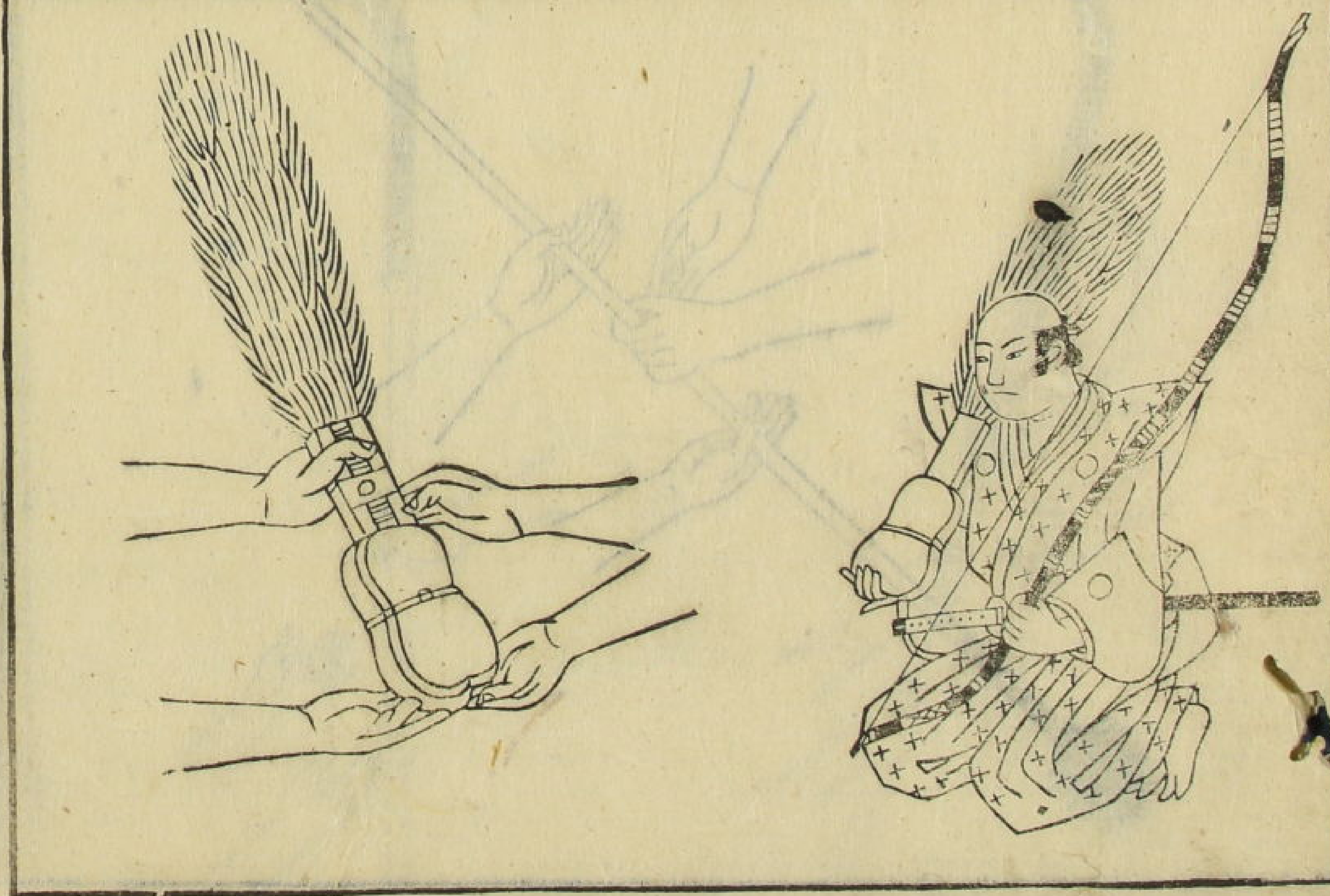
鎗請取渡しの事

鎗(やり)うけわたしは大かた長刀と同前(どうぜん)鎗は刃の向なしいづれ刃はむけけいとりかる事なく唯長刀は刃(え)なれば今手かし持先(わささき)とおよあてざるを無礼(ぶれい)とす持かる時石突(づき)をさきにして持あると云説(せつ)あれどもそれはわきまへなれど唯長刀のごとく穂先(ほさき)を向ふへかして持る可しひろき所せばき所のく長刀と同前なり及び図にある所は大かた押(おしもち)の鎗して人の請取るときおもしろくる鎗はさく石方もたるもの手より下ろして渡すべし主人の御前などにて人々下りは上られてたゝ御卓(たく)前渡らし長刀のは(えんがは)



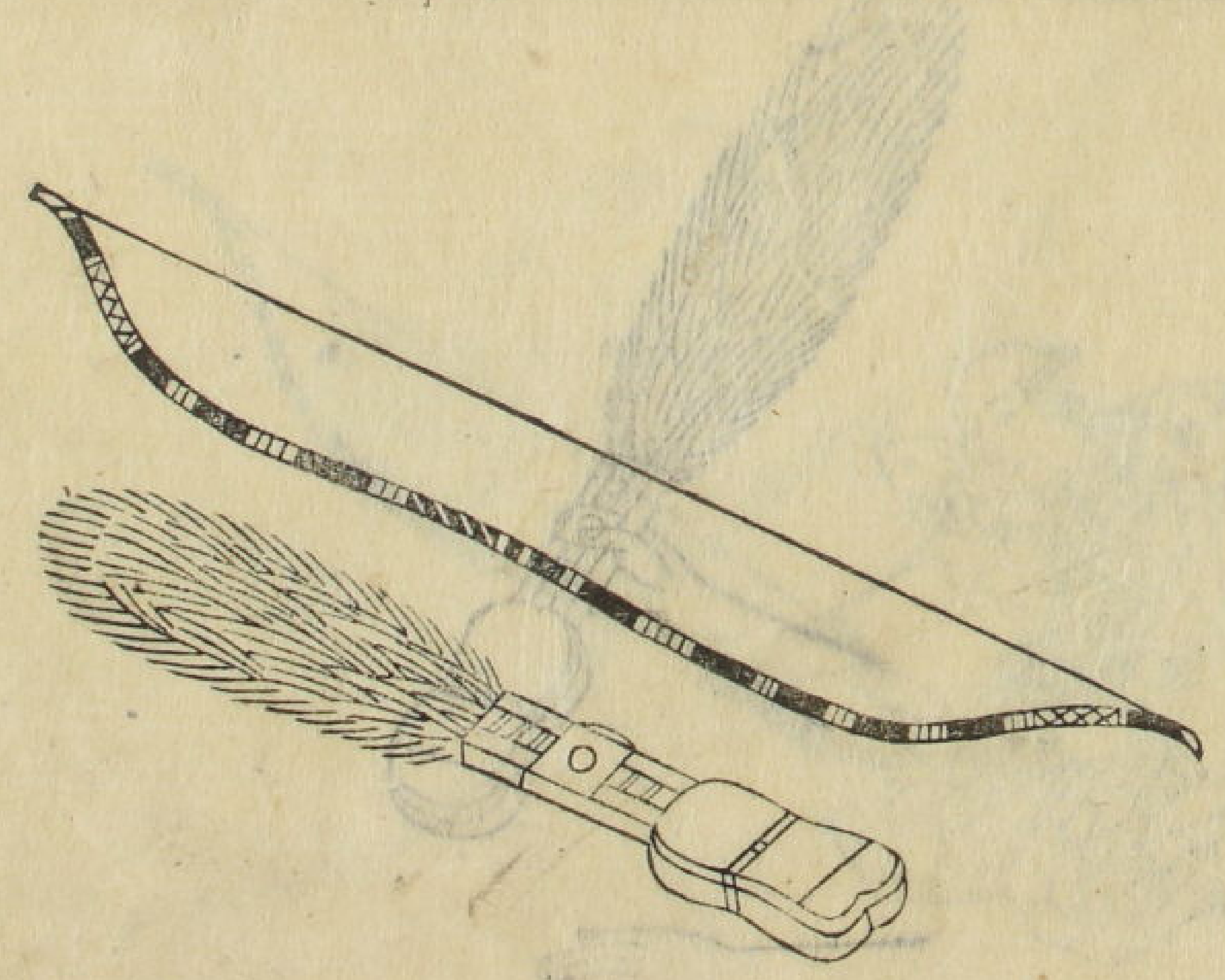
張弓靫請渡し様の事

弓と靫と出す時ハ弓を先ニ弦を下ニし渡し人
左の肩よりうつぼと弓とをうけ出
るし或云此時靫の表の方をむかふへ
むけよかやうにさたむる時ハ左の片手にて渡ス時
ほうしふくさにて取ある方を拍子づけ
うしとふさら出し右のひざをつき靫は
右のひざの前に押立る時に請取て靫
の表請取人の方へむくしかけおしてうけ
とらすべしと云へり請取人ハ中ぐらいに
請取りみなをして弓を受取人のうけ
出るごとく持だして時宜をし請取人は
持ちながら右の弦をさして右のかく持り
のやうに弭よ右の手に添へて請取人
のたの手へおさへかけさせて弓ハ懸ぬき
とめて弓ハ手にて下をしつかとうけおさ
はべし気をつけてせぬと云ふなし



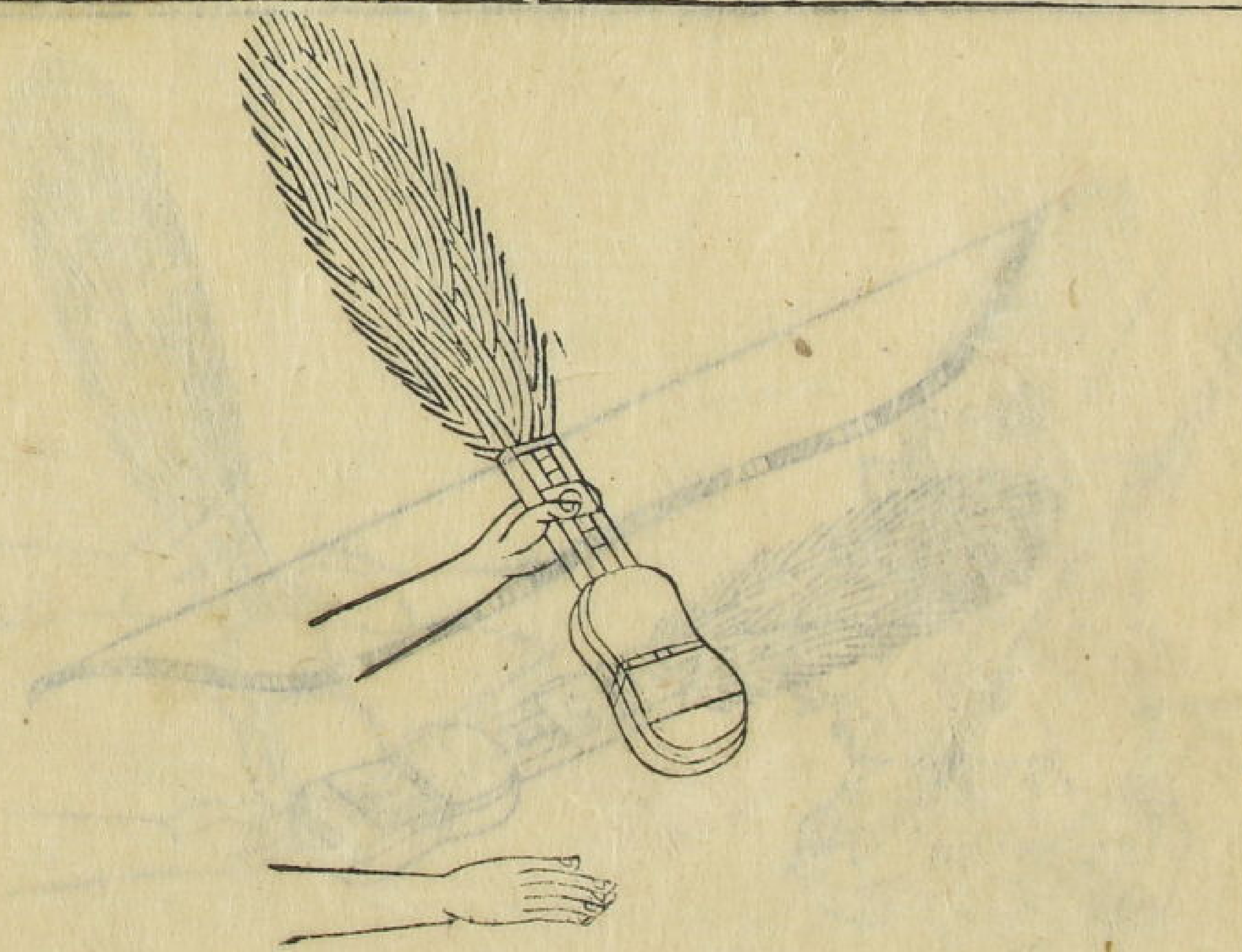
同持参之事

右の膝にて座より出前に出左のひざ
をつき右のひざを立て靫は右のひざを
さへ引そこしとふさら右ひくやりて
靫の矢先ハ人のかたになるやうにおす
ミうけて引こむやうにてさし出すをぬ
右のてとたのひざのうちよりすはつか
せくわろし右の手を掛の下にかけやう
弓竹弦方よりおさへて肉付の方を人へ
向ふぐくろうと弓の中ほどを持てわも
本弭を人の方へたてなりとやうにだすとか
けてうやうやしく人の方へさしよせて出
あうけわやかしとおおりとゞすべし此比
法ゝ一通りやかしてわりの法ハ右て靫をわ
たしとる時のことく立べし



宣請とる事

左の手にてふしの下を持右の手にて
さしうしろのふしのしたを持主人へ
むかひ左の手をつき左にさげて右手にて
細先を持左の手にて左の下を持
左の手は前より下へ添てかはせて持先
請人への主人ハ右にかはし持人に
次の所にむすびておろし請人ハ結
出る時ハ矢を刺ぬか故実にて参
る事をもねがふべし羽の出所しれぬか
枝の故実ハ唯一所に故実にあるべからず
左右より請取ハ先にあるべし持たるし
投げにも次のちかひなし左の手にてたて
れうし左の手にてひろくするし
下に置ときも前の下のごとし

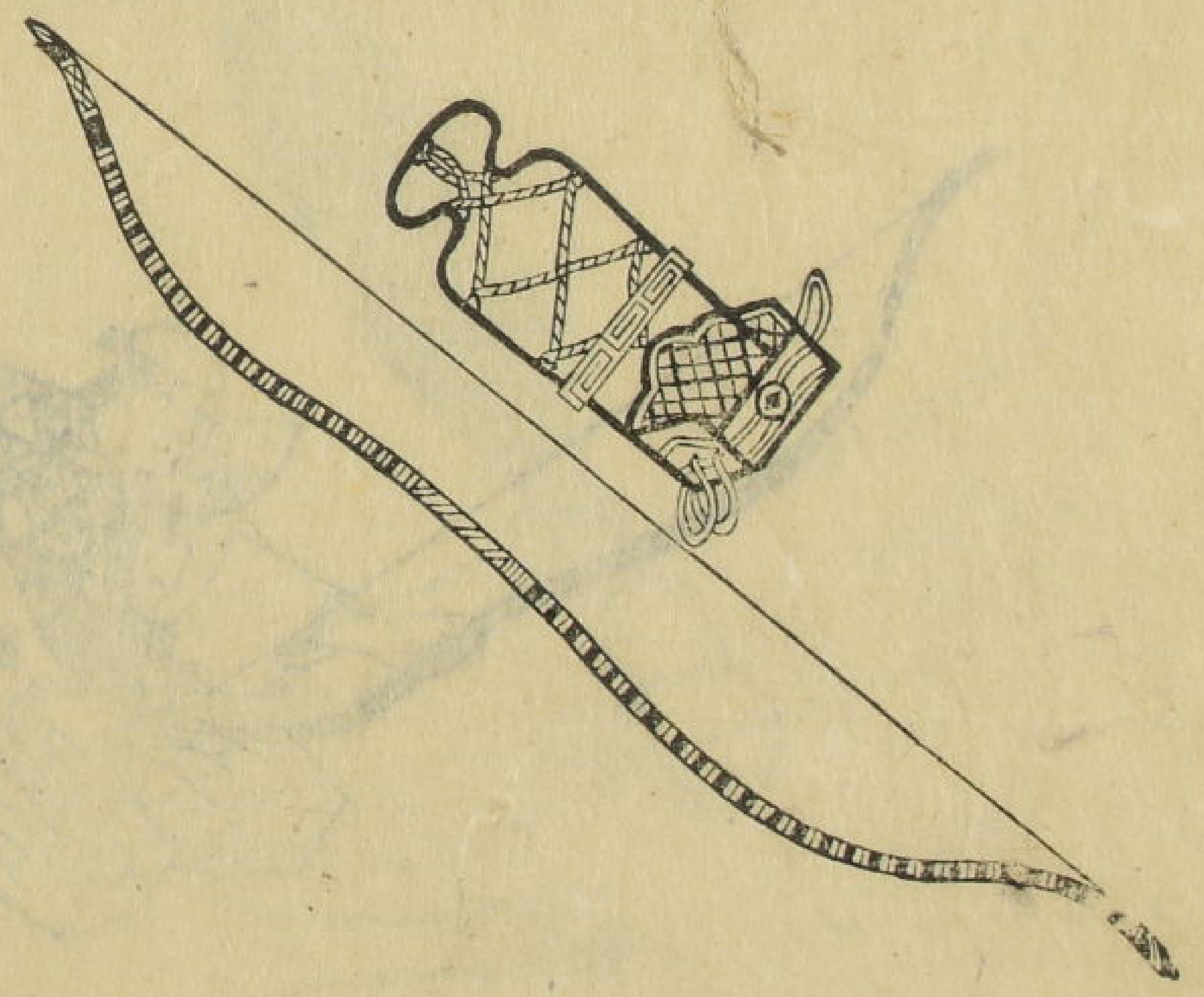


弓箙請とる事

うけとるやうハ矢の方ハ細くもち
き弓なりとも右の方にそはせ左の手
なり右ハ左にかはせ請人へむかひまて
弓を添るべきしまも弓ハ弓の握の下
とれば弭を左の箙にかへてもちそへ
中指紅葉指二つの間にはさむもの
うちおろしてまうけにうけとる
するしそのうち箙は左の手に持てさ
らしゑびらの左の側をもちて左のひざ
のうへにおき矢持は請人の方へむかせた
れば手はそへ請人のたよりにむかふ
さて請人へむかひそのおもてをみ
くみて左右にわたし一礼のうへ立べし
色代ことあるまじきなり

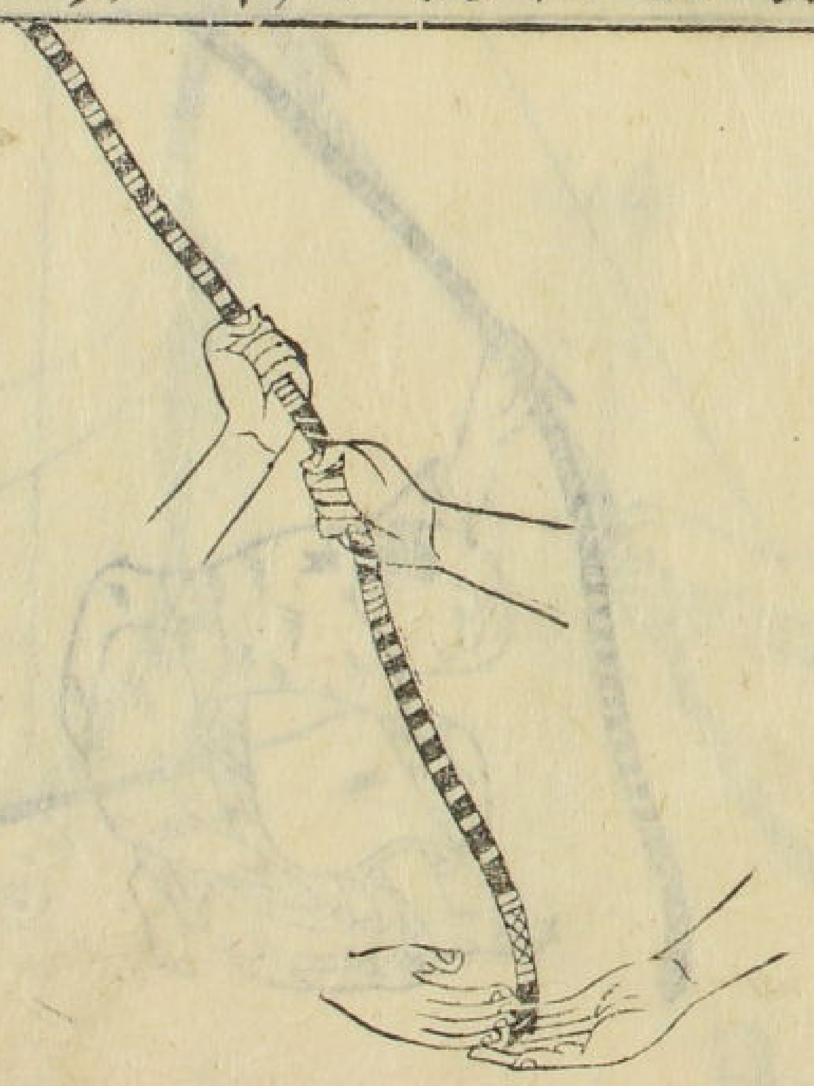
同持参の事

右の手にて弓のうらを持左の
手にて弓つかを末筈は上へ本弭を
下へ向て持参して弓を人の方へ
なしすゝみて主の前に座し此
左の膝を右の手にもちさしこしに前へ
仕立のとき持添くは右の方へ引
矢持は人の左へなしして弓を
のたのそばは右手にてもちくね左の手は
打留て右の側よ添て弓手の方
主人の前にくしよ添て弓をうつむけの方
持よひろふするし左側の弓はちかう
外竹の弓を内へひらきければ
出よかは内のちがひあるべしとなし
合へし



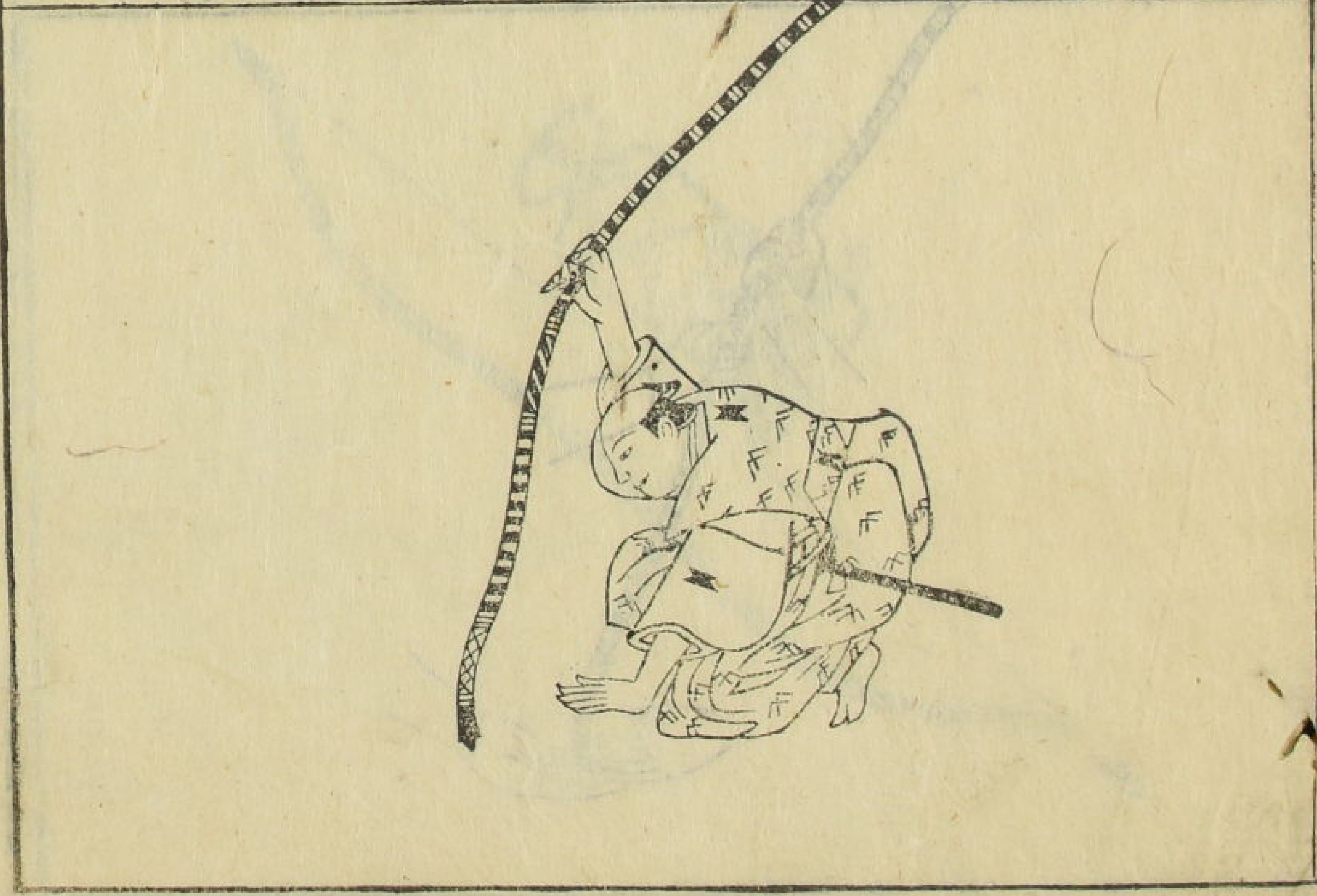
弓請取渡しの事

弓は取る人は弦を手向くして上に
下、弦の方八寸の所を矢の添を持て本弭
持あるときはをもひて渡す人ひざの膝ぎ
同じくはつき本弭を畳につき子のものは
弓をあへの中る所にて右の手にてもち
文左の手にて矢の事をして右の手は
本弭よすけてわたしおくし手付渡し
人指の爪は右の手にかくれたは本
まずかけて渡すべし萬弓添て帰中
しておきて弓は左よ持ち右の端下に
くそかけ節く右持とさし手渡し
を可成しまはり弓は取候ての外
行儀人よ弓のをせの其の仕付をもし
まうくも此心得にて礼の事は其のうちと
いふとのしかるべし

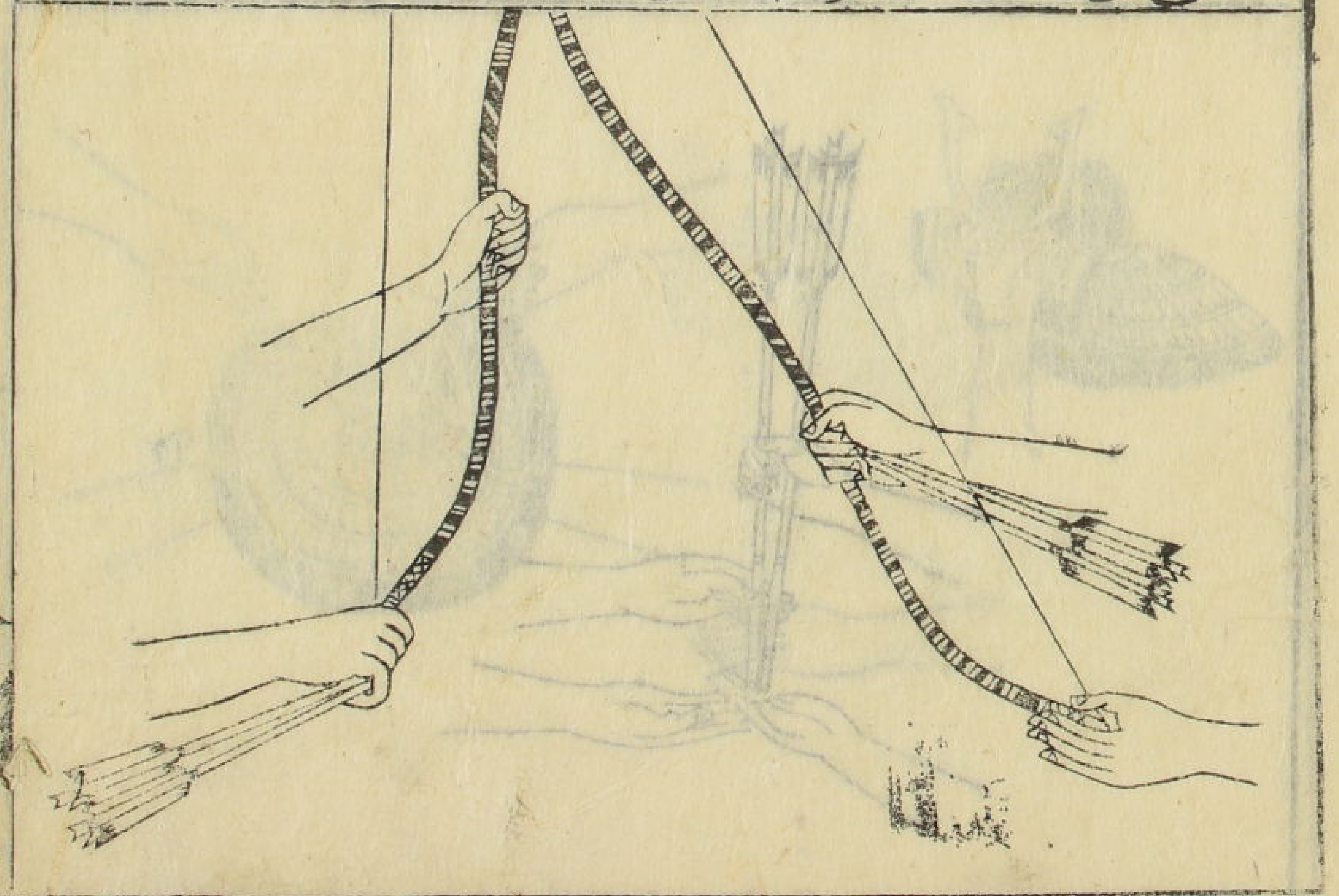


同持やう之事

さげてもちてひろうに弦ハわきにしは
内のごとく右手にておさへ弓手ハ握り
二三寸上なるべし弦はひざにておそ
ろふべしおきさまハひざのひざと
おさずとたのみてうきさうをとれと
弦右の方へふすごとくして持ちそ
かへし弦とものをそへさるをと
ひろくしてすぐに持て置事とわ
るべし又は弓のゆのくさしおゆ
伏時は弦をしかれやさるべし弓附
も引出て右もちたは弦をへて右よ
大ひきをひきをきてるがよきさ
なる弓はれば弓の前くは弓なし
あかし弦をゆるべし

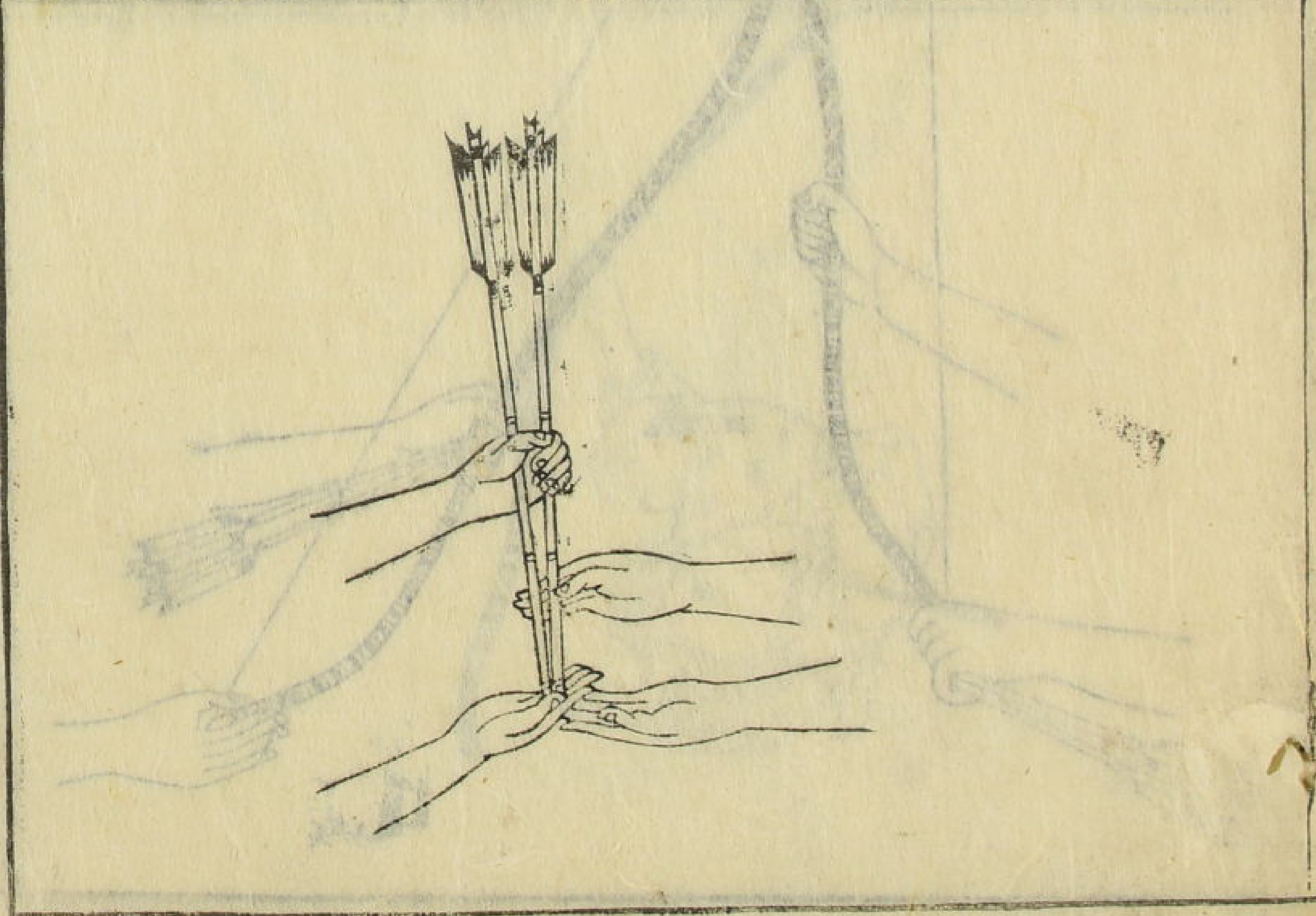


弓を人にはる弓を渡す時は
握の下は右手にて持矢をも右に持そへ添
むべし弦は上にすべし弓を打こみ出てを
くはらて右手にて握の下をもち右の弓は
ちへ右にもちて弦の方へ引そのてあるべし
弓の島打ちは右にあたる弓は弓とあるたの
手の上は弦をせ矢の筈は右にすべしまた上へ
し弓は弓はむすびのこをやきはつがせ
弓さんかし的場などの弓は右ざちとあ
上矢は右にそれらし射手の前しとたそ
み持へて板付とはらし矢をよべきしや
ゆる弓などさしる矢すらば弓とやすらすあく
うくびれかれのとさ一寸ん弓さつぐ弓
る事は矢束とかくもとの弓大的場の弓へて
弦は弦もへつぐ弦にへいうとへそうしし弓
速滞して古術の捷径を弓ず時ハ文礼あらん



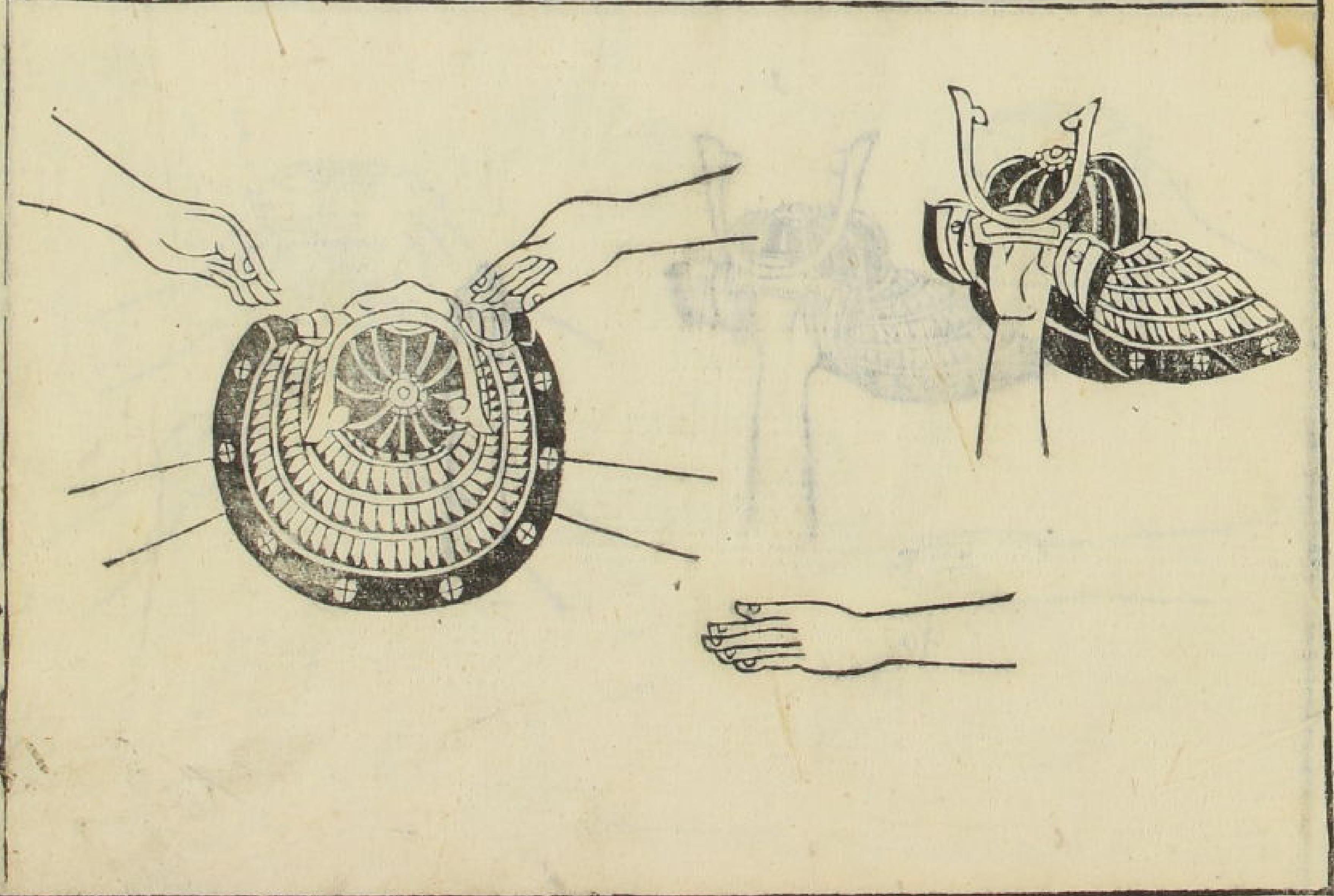
征矢之事

征矢ハ則征討矢なり請取渡しべき
事ハいつけの所より三寸上を
持てつかへ中四寸を持て渡す人の
中指にかけ左の手にて節さかひより上を
持てうけれハ渡人左の手をはなしれを
へ又左の手にて請とり一礼して立退
但矢などハ根付の方を我方へなし請る人の前へ
置つけそとるもあるべし
より出る事もあるべしとそ請る人
ハ何よりも人の方をもむき渡す
がよし是則渡残道具にて
剣刃の心なりんとかべし



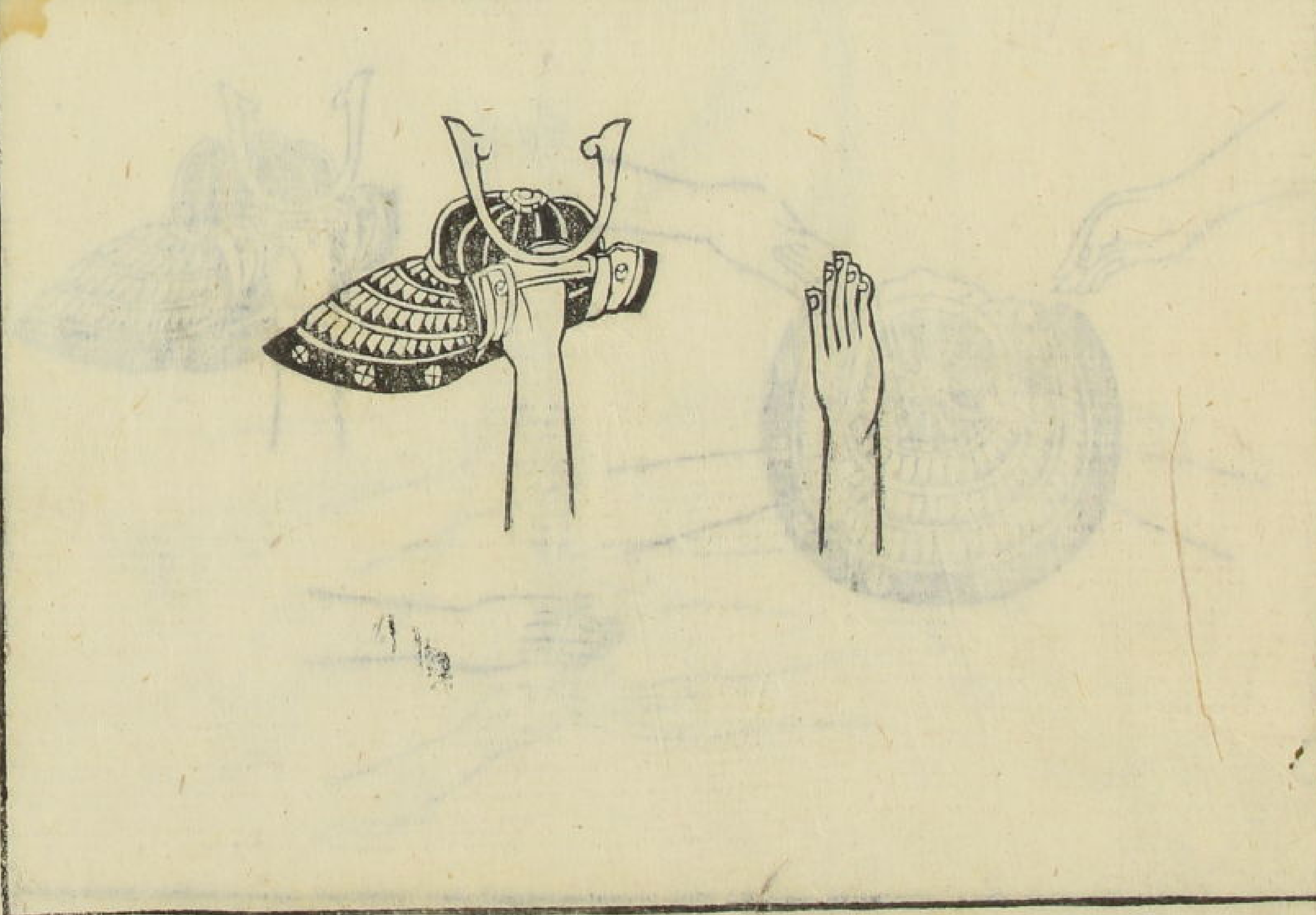
甲請取渡之事

右の手にてうけたるの内にさしへ指
よくかゝりし左人の内冑なる我が
方に持しさる所さ渡れ出し左をおさへ
親指を其ニ威をふれざる様に見得せべし
渡人渡さんとして渡れ投れ出し事
渡手ハ先左の手をさしけおさへ左をつきて一段を
云中に見ゆる所を我方へなし左の手を
うけ鉢ニさし入向ふを見せて射向を請取
人ニむけて眉庇より左の手にて左へ渡る
請人へさし出して右の手にて請けたる人ニ
左ハ袖へ請れいたしけとらんそのうち主の
とらんたを乃ち流し一礼して立べし主のび
の後付る冑ならバなびに手にかさへかざる
やうに心して又むびさけるをうけたる
の内へ振りこむかどんの仕付の心得し



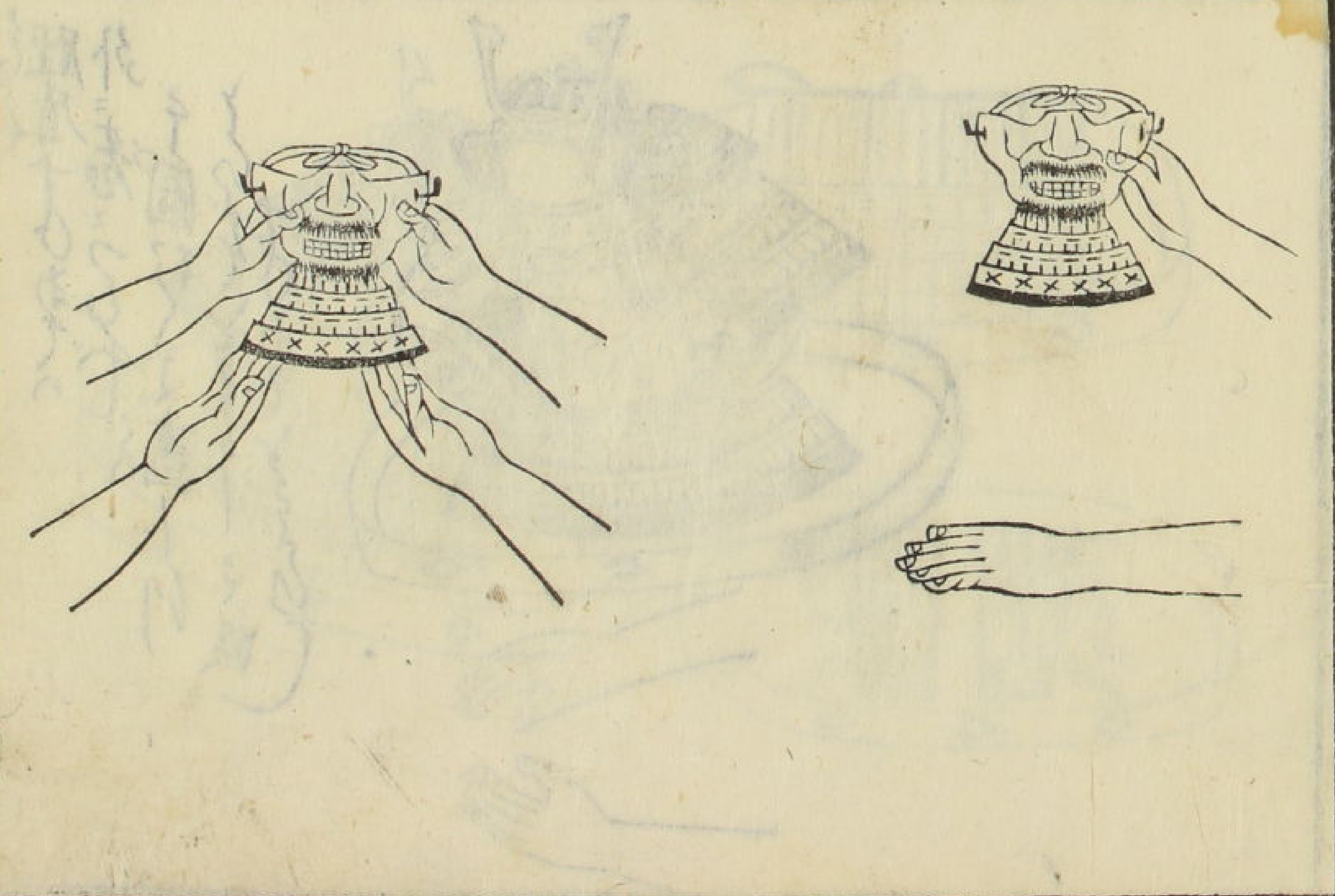
同披露のこと

請とるまゝかくたの手にさゝげ御前
まいそで左の手はつき披露いたしかぶ
とのまへ立が御前にむかふやうにひろうそ
れば射向は御前にむかふそのうちむか
ふは自分がけ右は自分がけそのうちは
うしろをもひろんせするとしたの手ざさ
げひろうすればでる手の方ゟ貴人へ
むかふべしすべて甲冑は左は右むかふへ
なは置なかんもうし左に乳中にて
さる方なればむかふへなし又兄かんるす
あるべうはびんか頬のまを福實とは
戸なればめさき人ゝなどは第のまにすべき
事てしろえよ評ほうかひろんるべし



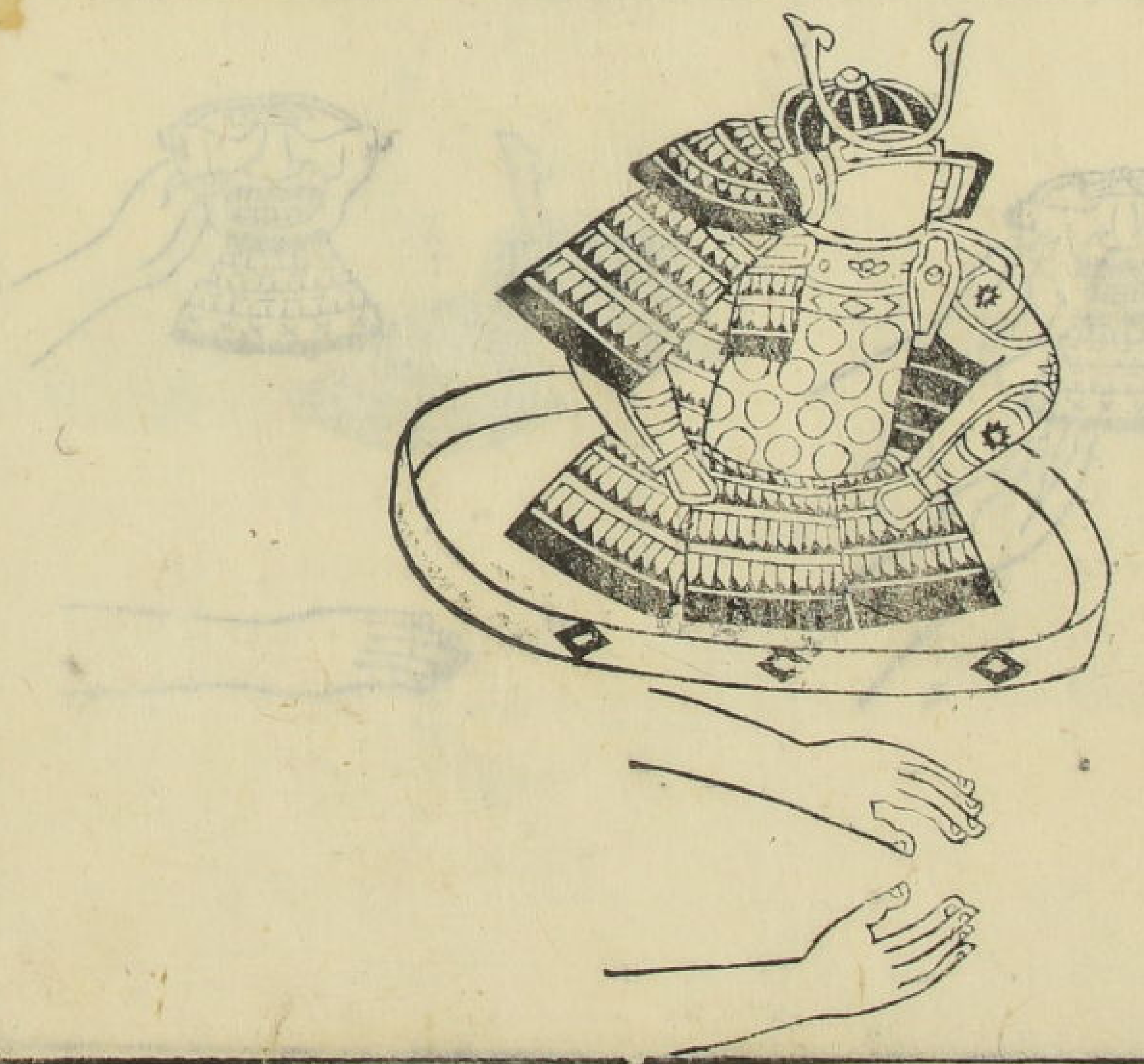
頬當のこと

頬當請とるさはべき次第は右の手にて
鼻をかりのあたりをとれ将前へ一礼して
左の手をもつよだれかけのふちを添
へてかろく請とり人さしゆびをあて
同じくゑりぎの下をとれ左はよだれが
けのまへ請とり中にさゝげそとねらん
するゆへにて左の手をもちかへ一礼して
ゑのまへさししひろうをするは付のど
くたゝさし上披露すべし前にも
いふごとくかぶとの前よかうるやうになし
惣体かくも不似合かんようなり
心得べし



具足甲請取渡しやう

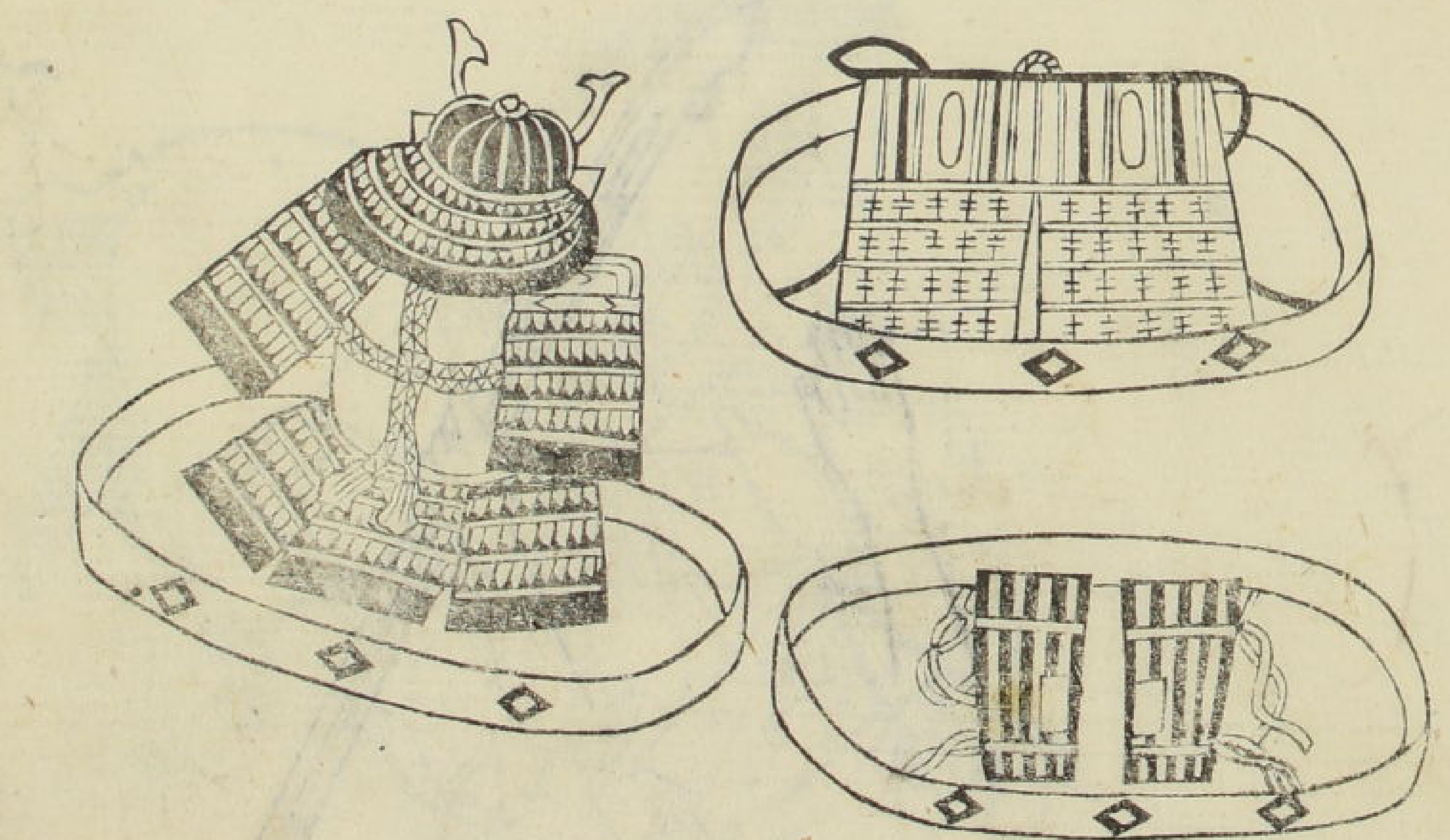
具足とハ武具一領の縫物よく九具そ
足したるを云ところを取るし物をけれ
渡すべき次第ハひろぶたに入ても捨にのせて
も胴袖胴立よりて甲をもとどうしてその
うぶとそでにかけて袖のびは結ぶそて袖を
ゆひ付るし其外書畫の如くさきのす、
おれが義もとうしつかみをさしてあらば
繰袖のとむすびあく人かく受べし
物渡すためたまもしめ出まれバいむけ
請取人にむかひて先細ぬ云渡の付絹に
手を懸け家をもして弁をまるし
手同請取人たたの手をかけ乱まで
たの方をとうさ出る人渡る役人なり
鎧を懸よのすてハ射向がらのきるし



脛盾すねあてハ
外に置つしべし
手圖わく書しけ
とりてとうらし渡
すねあてとうらし

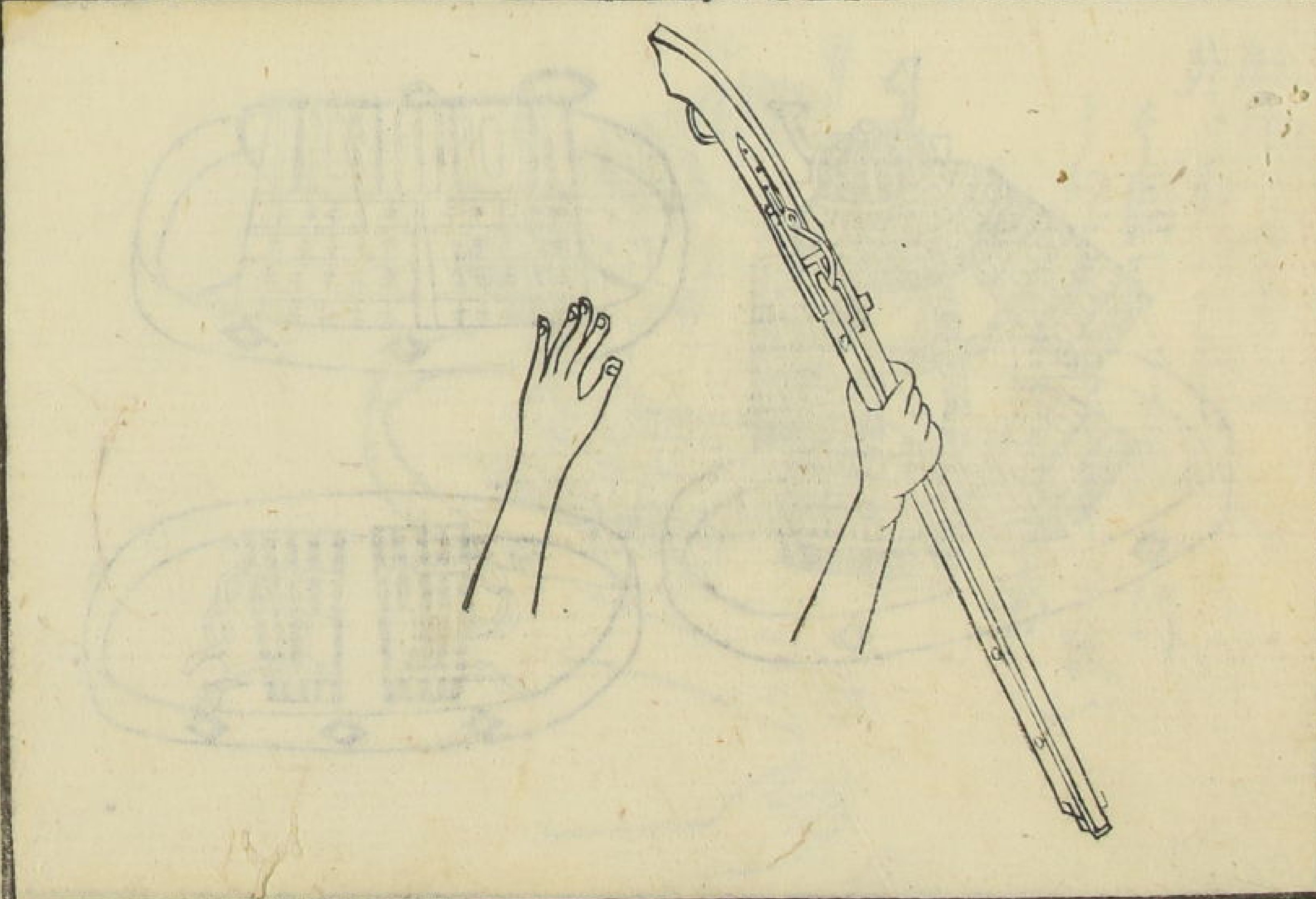
同袖やうの事

右のごとく台にのせ二人にて受取ひろうす
るし右の方をうく人膝を進て請取する
袖寛し物由緒にきおおすぢくて射向
を由緒よむりを甲をも作りね袖に
たところさかさぶけてうざりひろうも
るしよりてすひおそてハ別揃三尾
よまゆるし是かぶとの如ものごとく
右を両同にかけ手後主人の脇指に
たてさひやなりすねあてまひぞて
ハ甚一つにのせさらバ一人ぬハ外の人
持おもしこつにつきしが二人ふて持出で
納ハ右の方は家きたる人渡さざ
つく受入るし



琵琶請取渡しやう

琵琶を渡すべきやうハ左の手ハ前に抱
すゐばを上にむけ琵琶を弾くおの紙
左の方に直すはとをむけて手のひらひ
あはかん右を紙に打して左の手を
柱の下に入左のかくさき同前のお
下をもち右へ渡すべし頸をわる
むかうの方へやりて頸中の所をもち下さて
渡し請取てよし請取様さのミ手細なし
すミへむけまる気味のて小首ハ右の
かくもて渡し下さてもわるくひべきし
ひろうも是を准へて知るし手代
の為ミなれば語実とさわるべ
かし



馬請取渡しやう

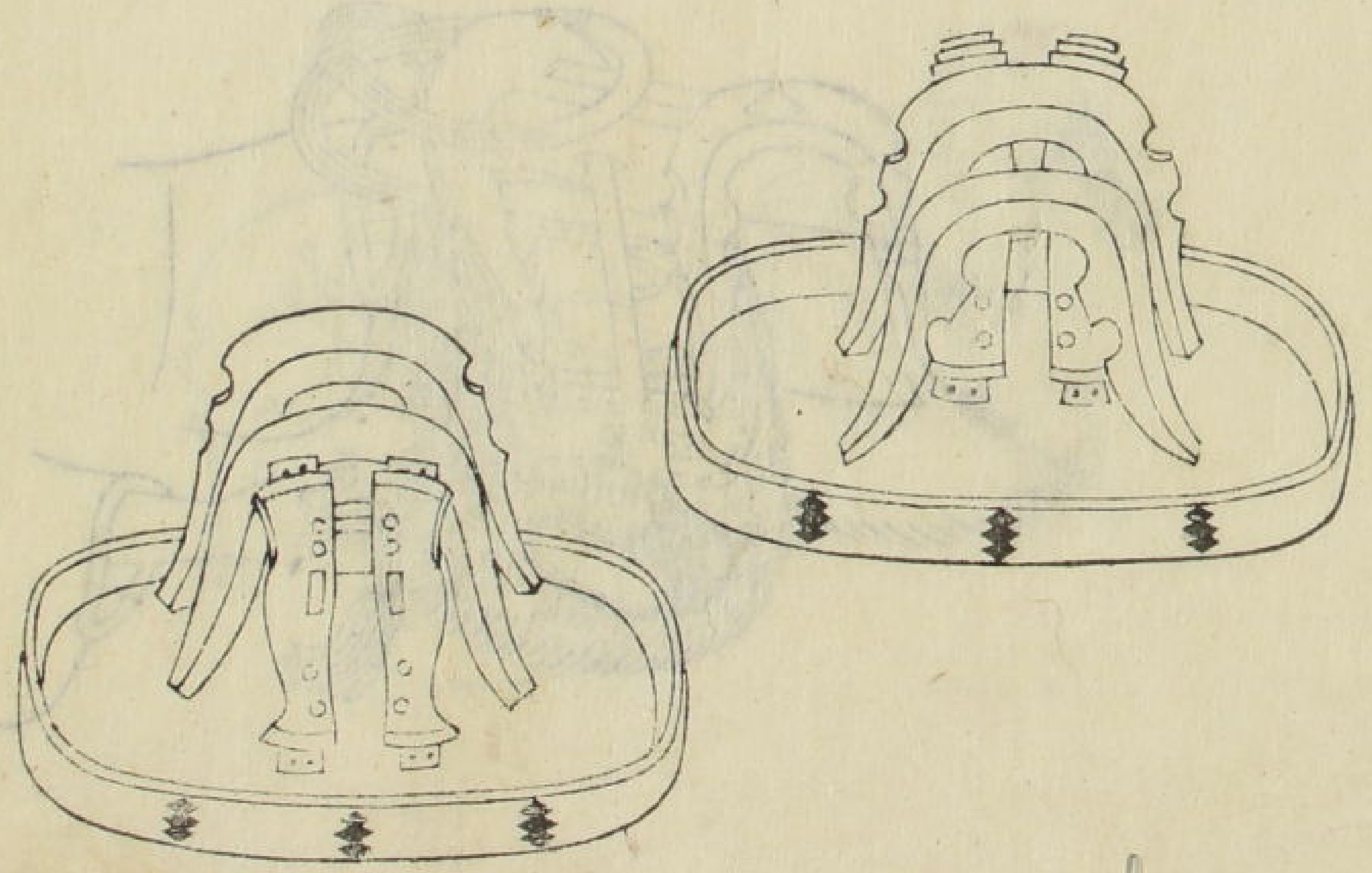
馬は雁山に行く人時請取役ハ云ふ所を
各自別に下りて口取二人かく轡を
さしかたしくばあとをもちも二人にて請取べ
し請取人の請ひこなさしと是様も
じ請取人ハ馬の右の方に付て渡し人の前
よりもんと手前に請けて手をひくべし
時請取人の方ハさく右にて取人の事
をおんとをとて上より付る付の
手をゑ(よ)方右ときさけて右左を
わたへ手よたのさかく輪をおれくし取
くはくて前におり出して八をかし
あさしかし三度して取り(?)は両間よ
うけるのちを与ゑ間にくじ軍陣は
てハむかへ(?)ますまでまであとハ
あきらぬこのしとも乱によるべき
をいはれしたし山本泰身に下べし

鞭請取渡す事

鞭（むち）と請取るべき所は鞭の一二寸下
と右の手にてうけ取前へ引付とる
鞭ともに左の手にて請取人のたづなし請取てとる
手にてうけ請取人のたゞし渡し請取人へも
よく鞭をうけて渡す人の左の手の下
のさきをひらき鞭を右の手にすけなる
ごとくの上にこれをうけとりてふさうたる
ひざの中程にそへて左の右にてれまきずし世
るうけ取渡しさと三尺ほどふくらぬ物すべば
左の持うれ乗さしむきとの左たまげ
ゆくすへやもあるべし何事も先様次第や
すつとも渡す方より手のかの時は何時
も右の手はたすけ鞭のうちもちろん
なり鞭を渡すともさうのあるべしとは人
たる様に候うてのきさよすけてひろくす
べきなり

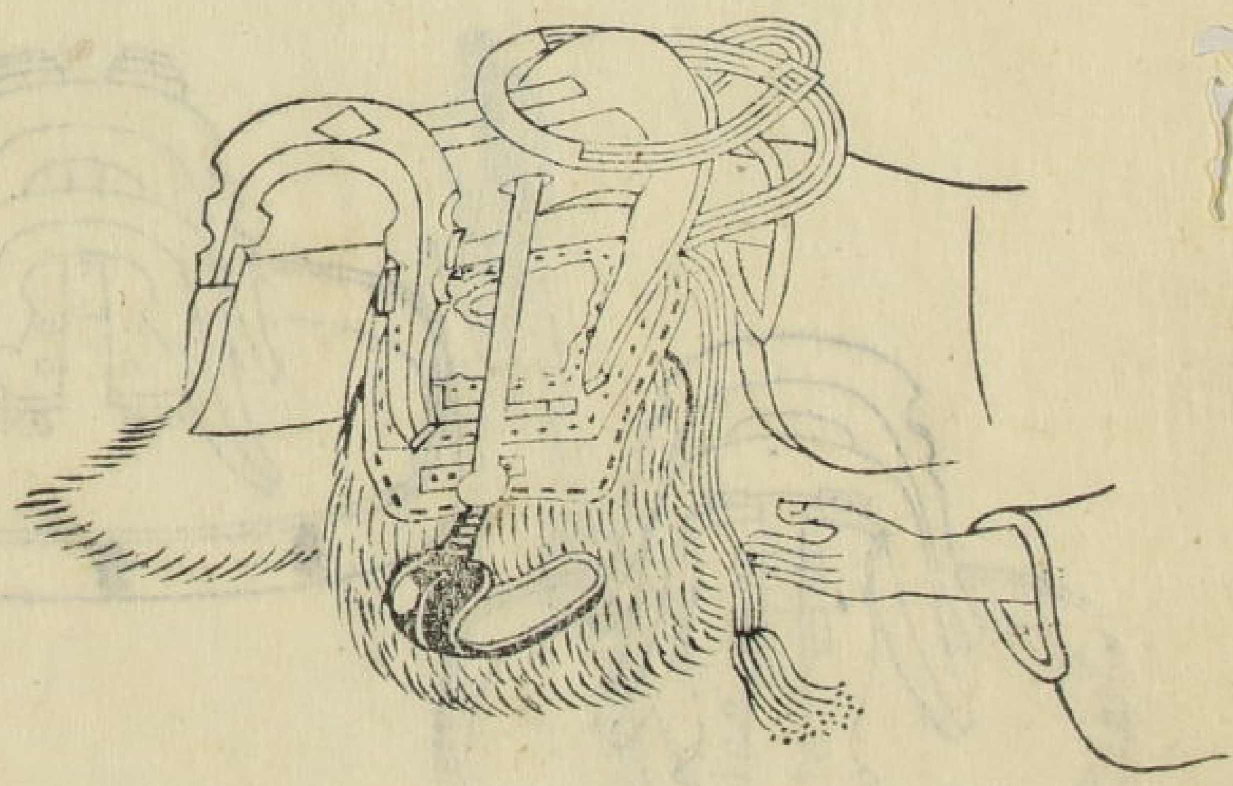
鞍請取わたしの事

主人より鞍請取候はゞさうあれ
いづれ前輪は我方へなして
持たのひざはつきながら我方へかゝるとも
むかふの御渡に鞍をおろし置まゐらすべし
前輪を請取人の左の方へむかはせの
かゝはりを立てくれはしき時請取人の左
ぞれ右の方へ向き主人の前に
むけて置くべし前輪のごとくにわきに
ぞれ前輪はむかふへなしおきて
候し私鞍の時は座敷に置くべきまく
まくらは主人へむけ置くべし
のりもの前輪ともに
納むる時は主人へむけて鞍のうしろをまへ
主人の右に我身をとりはらひて
右の方へ向けて鞍を置くべし



一仕かけ鐙之事

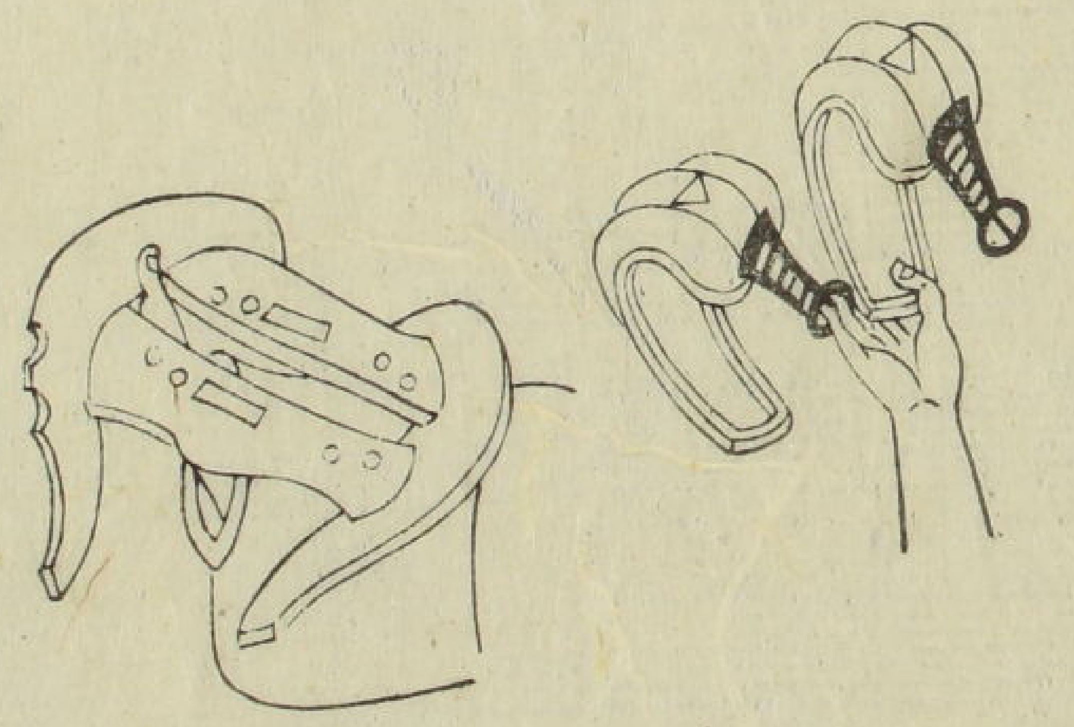
障泥鐙と仕かけたる鐙なしバ志ろまがい
とくる女ハおかけ肌付の前にたのまを
入てよかけて出るとし時と前輪ば
我か茶よなる折よりて投給ふ人の
前に乗りおのひざにつき前まいざき
と組みて後輪の方より女の手
をそへ付の前よさし入れ其のまよ
きしく入ると自由に語れ人のくく
なるしくのぞくしておとらとひろ
げたる女は倶をうけとらするし語
れ人へてよう其うけとらしもち
さおよ前のぞくたの手かけて障泥
ゆくもあうも右目おしたの手に掛
たのひざにつきさまに右のまとしろ
輪の前よりさし入れたるひろげて下よ乗
ひろうすへし



鞦鐙袋之事

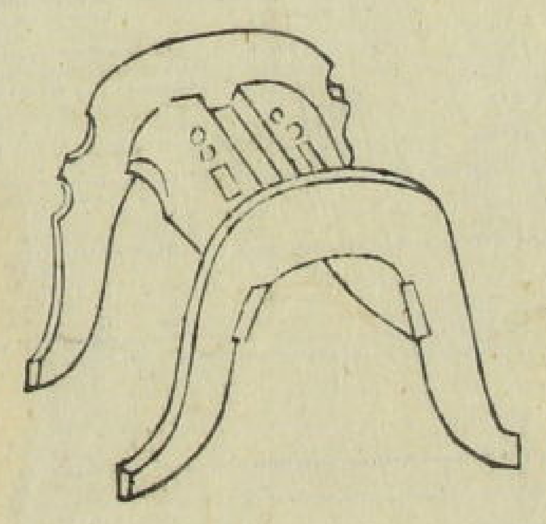
鐙ハかのごくたの総よりけ袋ハた
よ爪先をおち片足の前前かげに右の指
と中指とくれておかたのひざにつき
おもそてたたむたもとつき掛袋を
はめのぞくわきしり尻に付けれ
人あるやくうけとり右の方へ出すべ
し手付ては人鐙の前輪をむかんに
まわして掛るなして後さしそれ
と語れたの方へなそし片おさくし
よる人のおあるるでくさ手に掛合
せてみ立ろし前仕合かんよろし

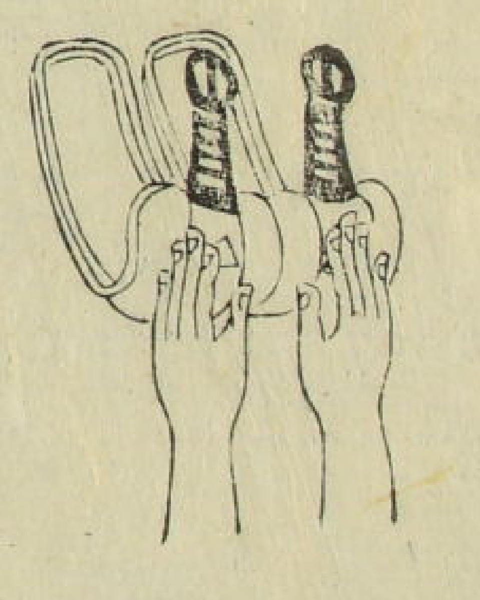
たてかなせまものはのけるうす
細目ともしよく乱をき
正極なるべし



同持やうす

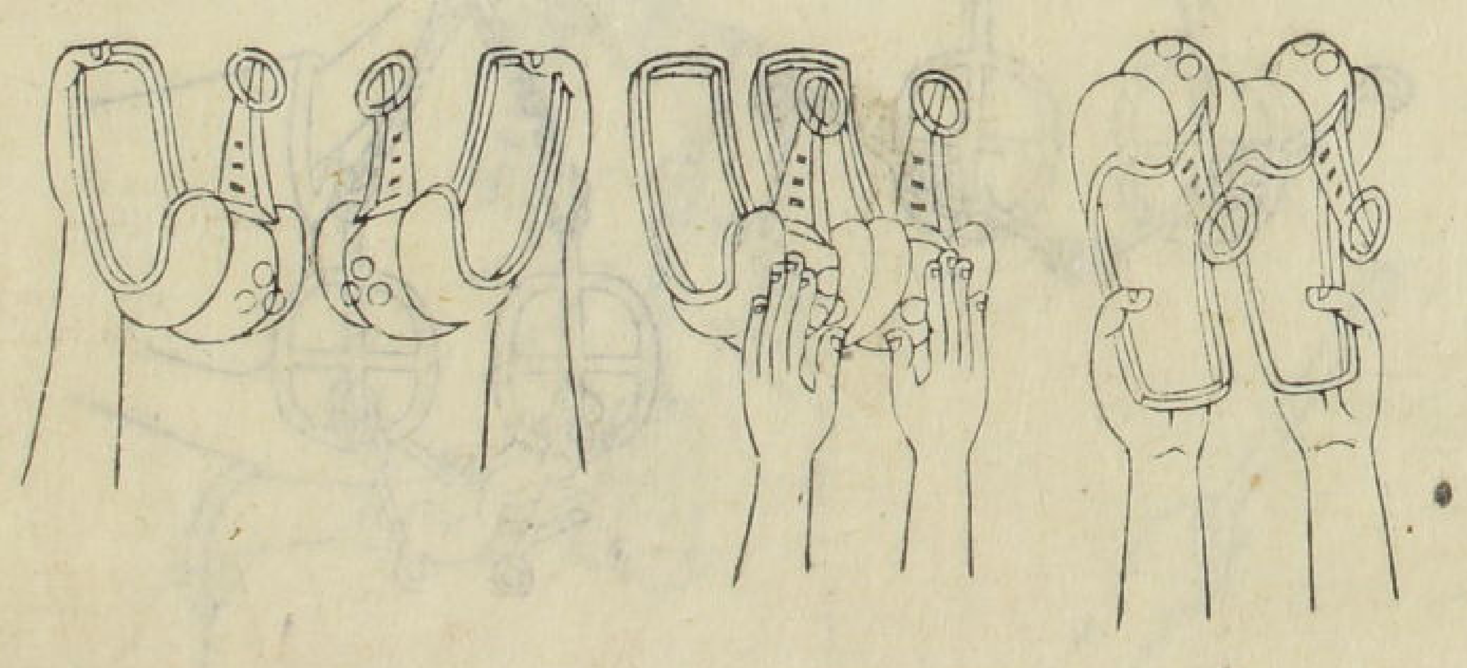
たのぐくおもくあぶみは右の手を先へ
鐙の紐ひろうすべし手綱は月八わくらん
時のぐくたゝみたくれちも常帯を
内常よりむかひて右あぶみへ分けキ
さげてつるのぐく鞍覆をさし挟
胸むべき鞍轡をしたゝかくのじ
らくを革皮ひわりまゝにし花の
くいるはかけたふくは常のそくあぶ
みをとり左手にはいづれとも手に
かんようなるべし
すべくたたのもれ左手をさら常
みえいかに候くちかとしつて
くちはしなむべきす
向轡なり





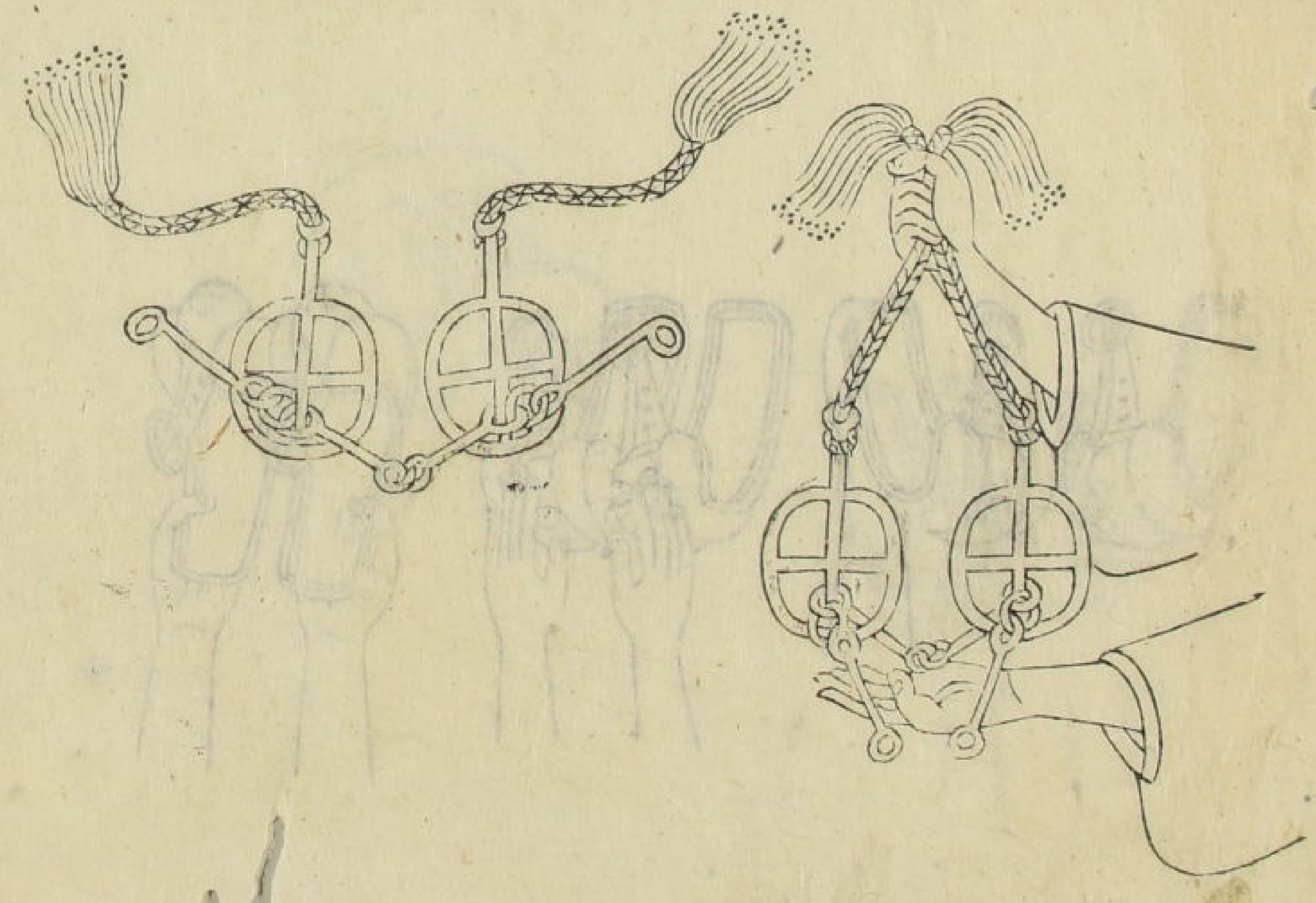
同鐙持やうす

あぶみ一足をあれよほすへ友のやう
いでより大持かけてたゝおお合せ
て持すし挟たる候方へなりも並
て手の本はを云てとむかの方をとう
をこる見をうけれ人よむかう屈をし
やるやうにててるはゝし時は並べより
中ふくわたしてもあるもし又一説
まいらく鳩胸とむかうへなしても
わたし添れぞしとかりそとむけ
むかふて添くさかいは添え人ながん
の手に添しき鐙をさく見候より鉄常へ
あさく見候よりそとむけとむかへ
なし添ねやしとひろうもさくれ
鐙をかけすべし



鐶緒絡の事

鐶をとりまハりては諸身ハたまけの
付るくりさたしバ左の手ふく おきけ
とれ左の手ふてゝをのせて拍手を
ねらけれ人ハよむりひ手神仕云はなは
たれよのせ左の手はつくべし鐶仕
也て手を従左のまく わこひ手ゆうけ
取人左手そてたまけとれ左ふくへを
とれ鐶のまくれあし取出べし
ひろうの諸身ハたまけとれ指先の手
ふくたえへ引まけ諸説よりま挟
露まもし又左の手よささげ左の手を
つきて鐶上を云ひろうしてもよ本なり
唯時宜によるべし



鷹据ゑやうの事

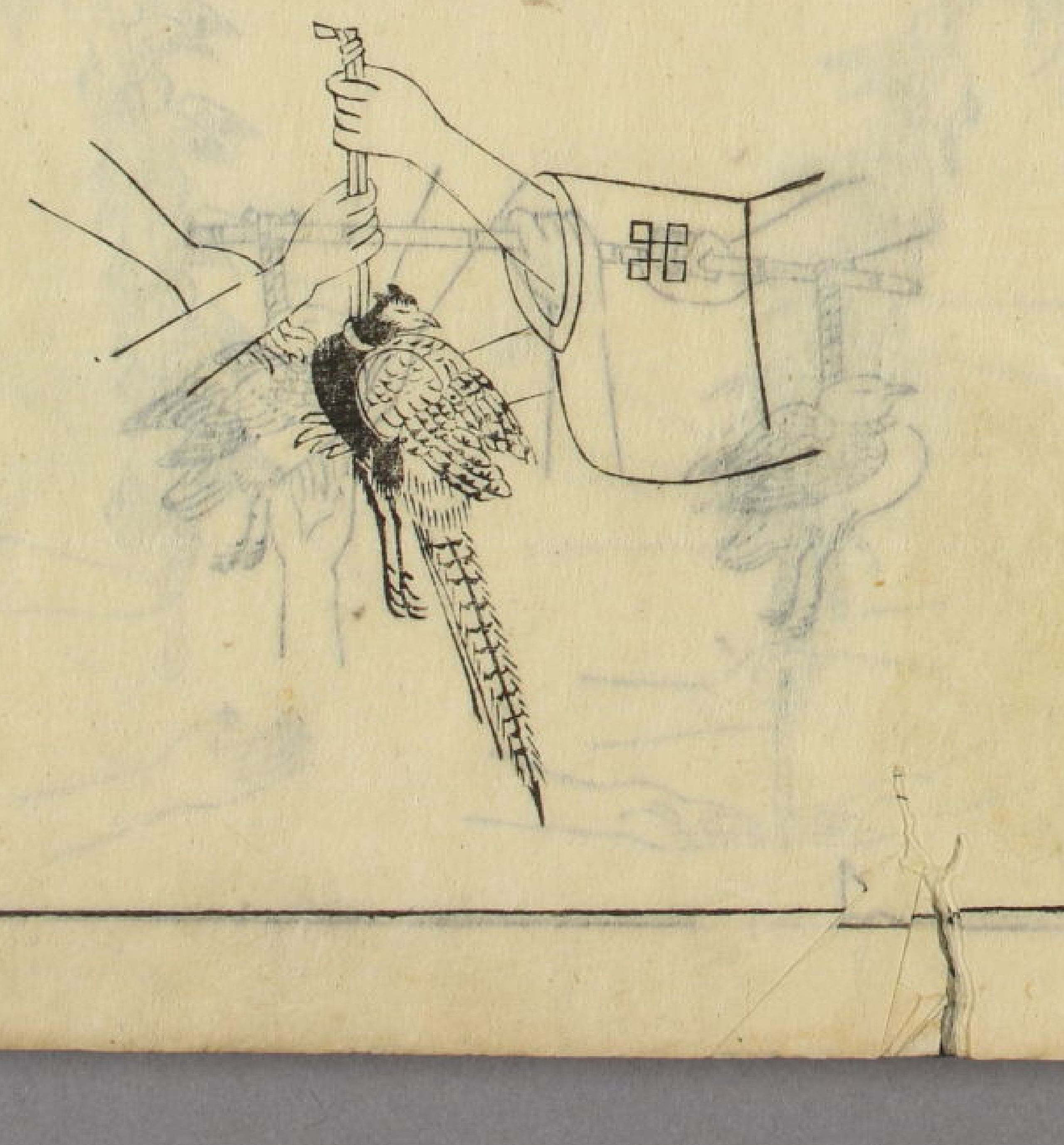
鷹据やうハ諸身ハ若鷹鷹たるべくバ百匹ごとく
たゞ大緒を編ふて手あみちをとらせ手くれ子
鳥を云鷹の手はりきむりへ百匹出よし手
時緒取人へよし鷹左ふて取人むちを据に
緒取人へ右ふくむちを手れ左の脇をさし
出し鷹はへ手振たら緒ふて大緒の端
よ手緒入てこぶしよ鷹据つまべしめ
して大緒のあまりをとこさげ端をれ
取出し取人引きこ一礼して立帰し式
時たゞひよ気づかうへからし安座やうじ
かべの側ふてわ鷹りあるへからし礼法
ぜんさうきく鷹据ゑ時ハ手網法
の手もしかかゞべし用心肝要なり

一 放鷹のこと

鷹はひろうきるときハなみさきの方を
ゆんてに入てなわをむちやくみきれ
のそは刷ひたに身もちの方をかなとし
うしろをかくそしくくすへにをさめて
此時よ出をし半人御意あらハ尾さ
きはむちふくあげて御目にかくる
なりわ鷹からち孔をちかくへさせて鷹
姿はあきらすへにあめてみせまる
蒼鷹ハ先にまくふ手せてはなを流
くろふ風情なくしあうけべし鷹の
おのくそ家氣をうかまうし鷹し
くハ鷹を長牽流よ羽よりきまむべし
ふうきおあれくすとぞ

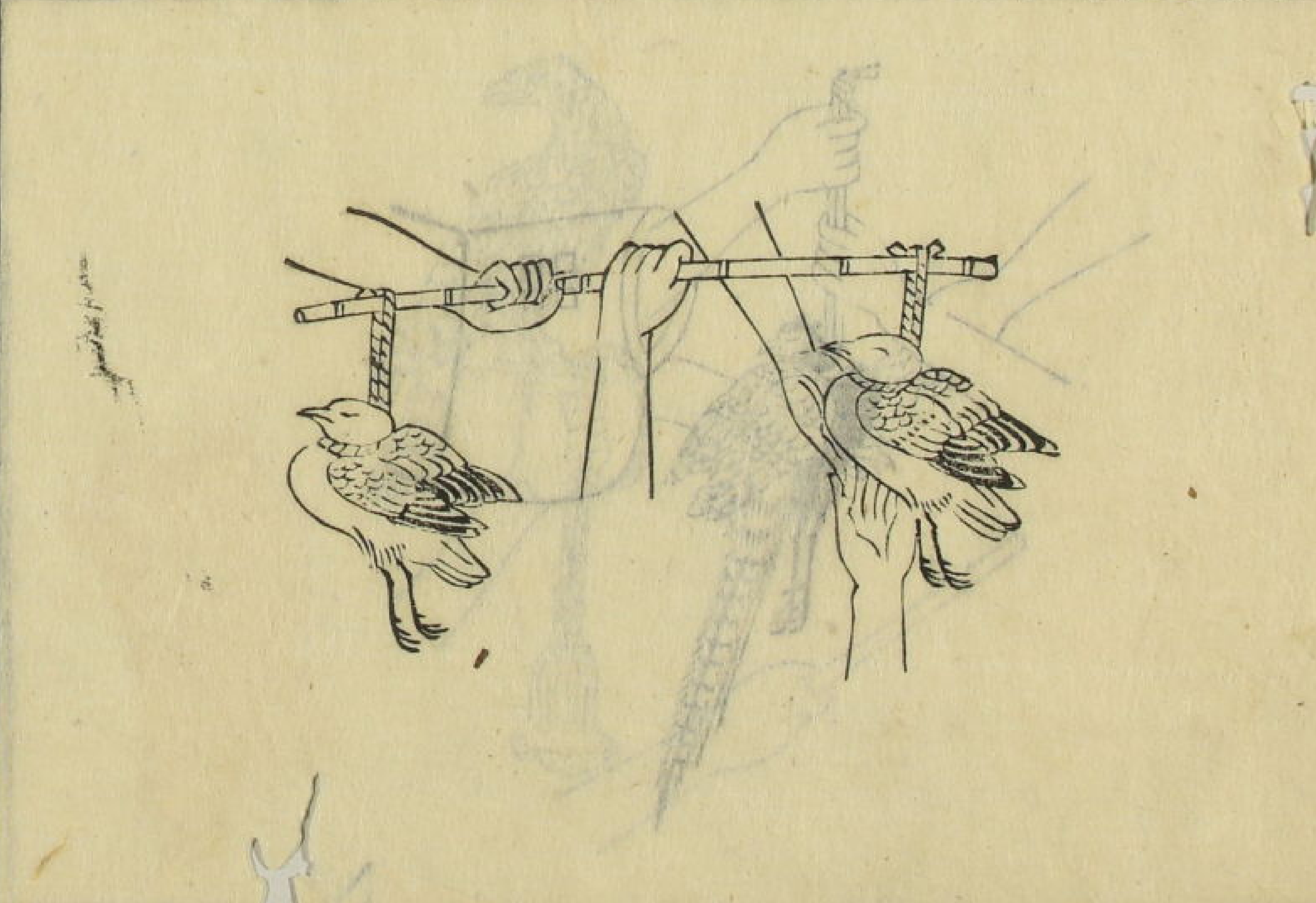
一 鷹とる鳥請取やうの事

鷹拾るとき取ハ何時も雉子よかぎるとし
その外ハ鷹の丁鷹丸鶴といへどきまし
かけ請をおよさげおすみひざをつき子
知は云たよ出しひくたは請わへ
向を出は紙が右まへ右の手は
餌嚢のおくりよ添く渡し鳥
の時は右の手は足の下よ添まくい
ていとく何時もふいくは人よむかの
させてれよ爲でしちふく時する鳥
又ハ鶉雲雀ふくうちくる鳥もおのく
を矢目をむりの人よみせてる壊
うなりみえくそれは不然さやうそん
まで心なり鉄家をとうけねさし
准へてれしあべし



同笄にかけたる鳥請取様の事

笄は左に持右の手にてひざはつきうけて
鳥は中にある程の所にて出候はたちあがり
ちぢめのほどくらひくく請取もの也
なし我もの方へ鳥は左の手
をそへわたしべきし請取人左の
手にて笄をとれば鳥はそれにて渡し人
の手に移してうけるなり
ひきうもいのくゝりまはしたの
手にて鳥をよせて出前にて持
おなじのひざつき渡すにひざをそはなし候
つきうけ鳥はさし上ありて渡す人の
出前なしひろうまでゆるり時は左て
立さるがよし物は座敷にかゝるなら
たを前にしてうくべし

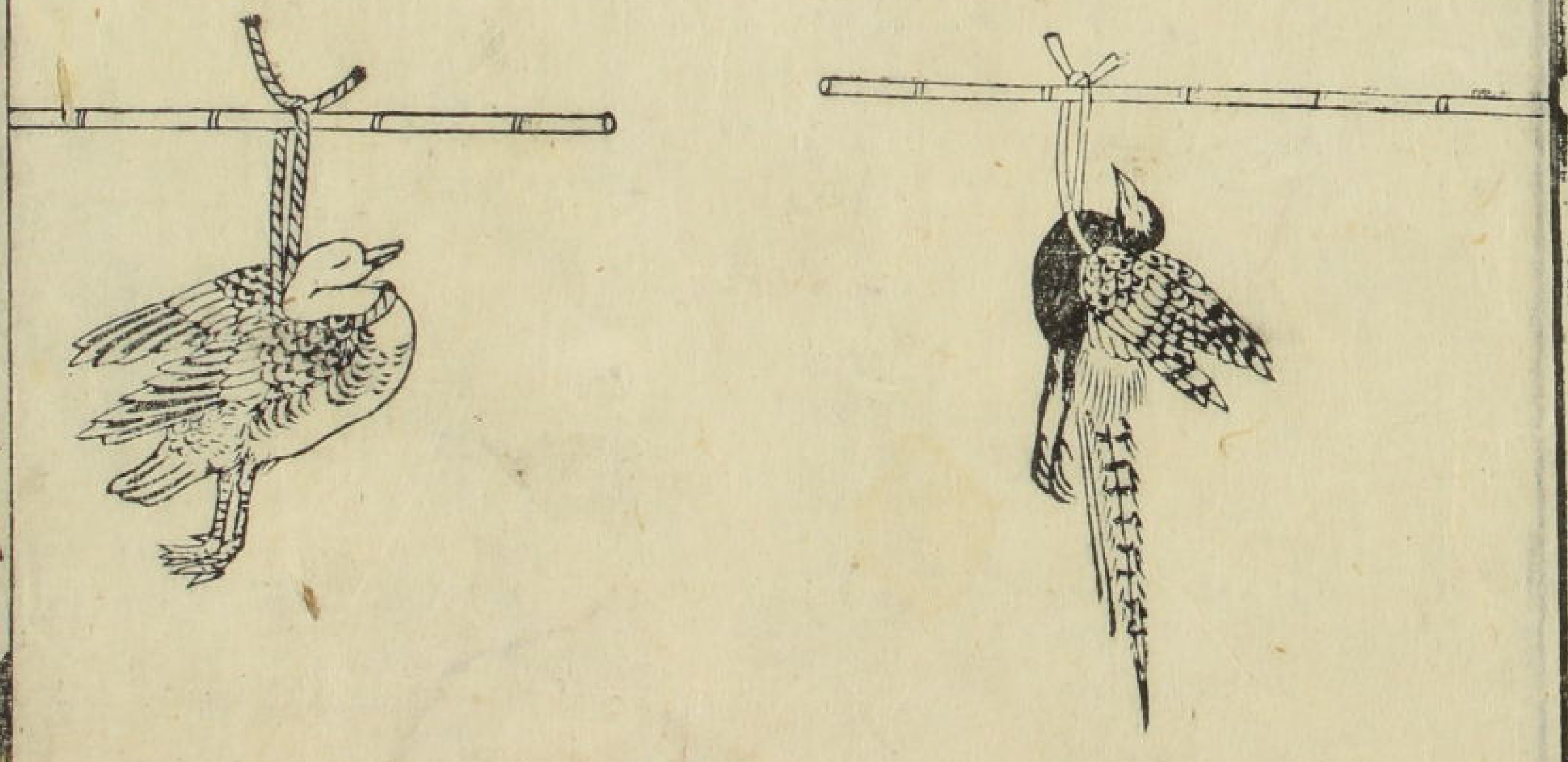


同竹捧る時の事

竹に鶉雀など付たる竹を持出て
渡す事は渡し方は右にかけて渡し人に向ひ
左の方に行してわたしのひざはつき立子
請取人は渡す方へむきて渡し人
なるべく竹を握たる方の手を添へて請取
也両手にて竹をもつべき也数多く
のする竹なれば三四寸まはりの竹は
左の三四寸右と分かり出当のはし
そぎかけたるひもつきは竹にわけ前と
ひとへにはさまて上の鳥の子は本より
ゆひきりくまはし芦よせて結付時
もニ手より三手よりくくりをひく事又
こもりかくゆわばし結びやられ
のくゝりの結ひをむすびし

一 小鳥結ゆることのす
小鳥をば三羽も五羽もあしとひとつに
くゝりて結びわたし人故実にしたがふ
四つ羽るのうしろ下に成てさうさうある
しかたさげたる羽にはいひねわたし
たのもふれる人たのもはさぬる其へて
扱ひし結ひ人さしもち左の手下
手からたはさまふくへて結ひ左の
手はつき一礼して立べきもし羽つて
もなるべく左に下げたるそへ結
たのひざにつきを四たのまゐにさ
たゝみにつきてひろうすべしかると
いふは人としのするしとい事をし
ながしそとひきうつぐ也すゝめなど
みなくたれ是故なるべし

一 鳥を鳥かけ様の事
鳥の名とことへど雉子ばかりをとりとへども
其外は四すべての鳥も鳥とまうしそのかけ様
の次第は山の生田のうしろとも見ゆ院鳥
雉子山鳥などのごとき山にすむ鳥ならばかく
かけ首かけてふくろの上にかけあし
雁鴨のごとき田にすむ鳥は首よりかけ羽
がいかけ背ふくむきまふさわぐさを山のまく
田のうしろとせう掛様は山鳥はふちのつる
田の鳥は瀧なりすは山様は下のむすび
より上のむすびのるす上のむすびち切
用そて指ふぶせし組一方はかなじく切也
里様は上下のむすびの寸上のむすびを
ゆびあらぶせなく切し一方はゆびてあぶ
せかてみじかくする也圖のごとし



乾安二丙辰辞 山下主記改